Tulips University of Tsukuba Repository

「五悔」から「五秘密」へ : 慈雲著『金剛薩?修行儀軌私記』(1802年)の位置づけをめぐって

著者	秋山 学
雑誌名	文藝言語研究
巻	72
ページ	1-45
発行年	2017-09-30
URL	http://hdl.handle.net/2241/00148415

「五悔」から「五秘密」へ
―慈雲著『金剛薩埵修行儀軌私記』(1802年)の位置づけをめぐって―

秋　山　　学

序

江戸時代の高僧・慈雲尊者飲光（1718-1804）は2018年に生誕300年を迎え，日本各地で記念行事が予定されているが，筑波大学附属中央図書館には，彼の最晩年における直筆本『法華陀羅尼略解』が所蔵されている（ハ320-59）．この『法華陀羅尼略解』は1803（享和3）年3月4日の成稿になり，同年2月24日に成った『理趣経講義』全3巻の約10日後の成立である．一方遡って，慈雲は1802（享和2）年に『金剛薩埵修行儀軌私記』を著したことが知られており，これらは慈雲の晩年における著作として重要である．筆者は筑波大所蔵の『法華陀羅尼略解』を中心に，晩年における彼の著作群，たとえば『神儒偶談』『金剛般若波羅蜜経講解』，それに『理趣経講義』などを参照しつつ，彼が示寂するまでの数年間におけるその思想的展開を辿ることを目指してきた（秋山2015，2016a，2016b，2017）．本稿はその一環を成すものであり，1802年の成稿になる『金剛薩埵修行儀軌私記』を手がかりに，慈雲の『理趣経』に関わる儀軌関連の著作をひも解くことにより，『理趣経講義』さらには『法華陀羅尼略解』に至る慈雲晩年の歩みをより正確に跡づけようとする試みである．

ところで『金剛薩埵修行儀軌私記』と称される慈雲の著作には，実は3つの著作が収められている．『慈雲尊者全集』の表記によるならば，それは題目と同じ1）『金剛薩埵修行儀軌私記』，それに2）『金剛頂経勝初瑜伽普賢金剛薩埵瑜伽念誦法』，そして3）『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』の3つである．同『全集』第8巻に収録された版に基づく頁数にすると，このうち1）は2～36頁（計35頁），2）は37頁（計1頁），そして3）は38頁～52頁（計15頁）となる．2）が極端に少ないが，これは2）が「頸次第」と呼ばれる「印明の名のみを示すのみで，印相，真言，観想文等を示していない簡単な次第」（小野1964；項目『金剛薩埵修行儀軌私記』小田慈舟筆）として記され

ているためである．これらの注疏には『大正大蔵経』（第 20 巻）に載る仏典本文が存在し，1）は『大楽金剛薩埵修行成就儀軌』（№ 1119；略称「大楽軌」），2）は『金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法』（№ 1123；略称「普賢軌」），3）は『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』（№ 1125；略称「五秘密軌」）である．この段階で，すでに第 1 作と第 2 作に関しては題辞が異なっていることに注意しておきたい．すなわち第 1 作については，慈雲は「成就」を付さずに把握し，第 2 作に関しては，同じく慈雲は「普賢菩薩」ではなく「普賢金剛薩埵」と認識していた．また，第 1 作に関しては筑波大学中央図書館に筆記者不明の写本が収められており（ハ 320-41），その題辞は大蔵経に収められたものと同じく『大楽金剛薩埵修行成就儀軌』である．この写本と『慈雲尊者全集』所収の第 1 作のテキストとは，中途より同一本文となるが，冒頭部に関して若干の相違を見せる．そして，『慈雲尊者全集』第 8 巻巻頭に載せられた写真版から判明することであるが，これら 3 儀軌のうちの第 3 儀軌『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』に対する慈雲の添削が終えられたのが「享和壬戌」すなわち享和 2（1802）年である．したがって正確にはこの『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』の添削が 1802 年，『理趣経講義』が 1803 年，そして『法華陀羅尼略解』が 1803 年の成稿だということになる．

1）問題の所在

さて，『大正大蔵経』第 20 巻に収められた№ 1119 から№ 1125 までの 7 つの儀軌は，ひとまず「金剛薩埵儀軌類」と総称することが可能である（福田 1987；松長 2006：30-31）．上に挙げた 3 つの儀軌以外でこれに含まれるものを以下に挙げるならば，順に『金剛頂勝初瑜伽経中略出大楽金剛薩埵念誦儀』（№ 1120A，略称「勝初瑜伽軌」；「略出軌」とも称するが，本稿では前者に統一する），『金剛頂普賢瑜伽大教王経大楽不空金剛薩埵一切時方成就儀』（№ 1121，略称「時方成就軌」），『金剛頂他化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌』（№ 1122，略称「理趣会軌」），『普賢金剛薩埵略瑜伽念誦儀軌』（№ 1124，略称「瑜伽念誦儀軌」；「普賢金薩軌」とも称するが，本稿では前者に統一する）である．これら計 7 個の儀軌は，相互に「異訳」であるとすることも可能ではあるが，子細に検討すると相互に少しずつ異なるため，慈雲がなぜ上記 3 種を取り上げることにしたのか，その次第を考えることは興味深い課題である．

一方『仏書解説大辞典』その他によると「金剛薩埵法 6 種儀軌」という表現

が散見される．この場合，上記の 7 種儀軌のうちから異種のものとして何が漏れるのか，十分に明らかではない．内容からすると，最後の№1125「五秘密軌」が「もっぱら五秘密尊のみを説いて，他の諸儀軌の如く十七尊を明らかにしていない」（小野 1964：項目『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』神林隆浄筆）ため，これが漏れることが予想される．しかし，果たして慈雲がそう考えていたかどうかは再考の余地がある．なぜなら№1122 の「理趣会軌」すなわち『金剛頂他化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌』には「金剛薩埵」の名が入らず，それは『大正大蔵経』の名称による限り，№1123 の「普賢軌」すなわち『金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法』も同様なのであるが，慈雲は上述のように後者を『金剛頂経勝初瑜伽普賢金剛薩埵瑜伽念誦法』と認識していたため，この理解に基づけば後者は「金剛薩埵法」に含まれることになり，「金剛薩埵」の名が入らないのは「理趣会軌」だけということになるからである．普賢菩薩は「密教像としては金剛薩埵がある」（中村ほか 2002：859）とされるものの，前者は顕教での，後者は密教での理解として峻別することも，あながち不可能ではない．

6 種であれ，7 種であれ，これらをひとまず「金剛薩埵軌類」と総括する場合，これら各々の性格づけの際に基準となり得るのが，各儀軌において用いられている真言の文面である．これに関しては八田幸雄が詳細な『真言事典』を刊行しており（八田 1985），本稿作成に際しても大いに恩恵を被った．本稿では真言の提示に際して，その前に『真言事典』における通し番号を付すことにした．上掲 7 種の儀軌類について，八田による同書巻末の「真言番号対照表」を参照するならば，7 種のうち真言に関して大いに異質なのが№1122 の「理趣会軌」であるということが判明する（川崎 2007：464 をも参照）．他の 6 種儀軌については，相違は見つかるものの，№1122 の逸脱ほど大きくはない．そして慈雲が手掛けたのが№1119，№1123，№1125 であるということを考えるならば，慈雲は当初より№1122 をやや射程外に置いていたとも言えそうであり，そうなると慈雲の目指していた目標が，儀軌の注解活動とは何か異質なところに置かれていたと推測することも可能かも知れない．その際に想定されうるのが上述のような「金剛薩埵との合一」であろう．ちなみに慈雲の 200 回遠忌を期に作成された「高貴寺 DVD」によれば，慈雲は上記 3 点の注解以外に，№1120B として『大正大蔵経』にも挙がる『勝初瑜伽儀軌真言』（1120A の真言のみを抽出したもの）に関して，『勝初瑜伽儀軌　真言義注』を遺している（№0399；前田弘隆 2008-2010）．これは梵文のみの儀軌文言であるか

ら，慈雲が『梵学津梁』に収めようと考えたとしても不思議ではない．

いずれにせよ『大正大蔵経』の番号で指示すれば順に№1119，№1123，№1125の注疏の集合という形を取る『金剛薩埵修行儀軌私記』であるが，『密教大辞典』その他によると，このうち最初に取り上げられる「大楽軌」は，この中で最も次第の整備された儀軌である．そのこともあってか，『慈雲尊者全集』の編者である長谷宝秀（1869-1948）師は「金剛薩埵修行成就儀軌私記一巻は尊者の記なり．尊者御草稿の本，京都西加茂神光院に在り．彼本は尊者弟子をして尚書せしめ，更に御直筆を以て処々添削を加へられたる者なり．今彼本に依りて之を出す」とし「此の中，大楽軌，勝初軌，五秘密軌の三種を出せども，題して金剛薩埵修行儀軌私記と云ふは，最初たるに約するか」と注記しておられる．この見解が『仏書解説大辞典』その他にも踏襲され（小野1964：項目『金剛薩埵修行儀軌私記』小田慈舟筆），現在ではほぼ「3点のうちの冒頭に「大楽軌」の注解が置かれているため，全体の題辞にも「大楽軌」が採用された」とする説が通説となっている．

しかしながら上述のように，子細に検討するならあながちそう簡単に結論づけることはできない．

あ）3点のための総題が「大楽軌」の正確な題辞に一致しているわけではない．筑波大所蔵本の題辞は，正確に「大楽軌」のものと一致しているが，これは「大楽軌」1点のみを載せる写本である．

い）上述のように，慈雲は金剛薩埵との入我我入を目指す上で，必須な儀軌を「編んだ」と推測できるかもしれない．

う）「大楽軌」の注だけを取ってみても，慈雲は№1119以外の儀軌から適宜補って注記している．

実際，慈雲は「大楽軌」への私記のうちに，金剛薩埵儀軌類全般に通じる細則を記入している．たとえば「普賢行願」に関わる細かい規定がこれに類する．すなわち№1119，№1123，№1125の三儀軌のすべてにおいて，儀軌の開始に先立ち，『大蔵経』には記載されていない「普賢行願」〔すなわち「五悔」〕の読誦が慈雲によって指示されているのである．これは順に『慈雲尊者全集』の頁数では9頁，37頁，40頁に該当する（詳しくは後ほど検証する）．

折しも，これまで最晩年の作とされてきた『理趣経講義』の10日後に，『法華陀羅尼略解』が成稿されていたことが判明したため，慈雲の内面を推測するための新たな資料が現れたと言えよう．本稿は『金剛薩埵修行儀軌私記』に収められる諸真言を辿り，慈雲の注記をひもときながら，これまでの通説に対し

て異を唱えようとする試みである.

2)『金剛頂経勝初瑜伽普賢金剛薩埵瑜伽念誦法』

ではまず初めに, 3 つの儀軌の中間に位置している『金剛頂経勝初瑜伽普賢金剛薩埵瑜伽念誦法』を取り上げよう. これにより, 前後 2 つの儀軌を慈雲がどう位置づけていたかも理解できると推定されるからである. 以下【 】の中に付記するのは, 後ほど 3 点目として検討する『金剛薩埵修行儀軌私記』ないし 2 点目に検討する『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』の中の (『全集』版による) 何頁にその真言が対応するか, 対応箇所を便宜的に記したものである. 言うまでもなく, 三つは相互に異なる儀軌であるので, 番号が相前後することは不思議でない.

「初めに, まさに清浄の明を誦すべし【3】. 或はraṁ字を観ぜよ【3】. 次に観仏【8】. 驚覚【8】. 起礼【9】. 四仏【5-7】. また右膝を地に着けて普賢行願を誦せよ【9】. 然る後, 薩埵の跏を結び【7】, 金剛掌【10】. 遂に合し堅固に縛し【11】, また陳べて開心【11】遍入の契【11】, 三昧拳またしかり【12】. 次に大印に住し, hūṁ字を誦せよ【12】. 旋らして五仏灌頂【13-14】ならびに繫鬘【14】拍掌【15】. また極喜三昧耶に住し【16】, hūṁの明を誦し, 四処を加持せよ. 次に不空王の契明をもって衆聖を驚覚し, ならびに四摂【22-23】の印明をもって召し入れ縛喜せしめよ【16】. 次に閼伽を献じ【17-18】, 旋らして十七聖の羯磨【18-23】, および三昧耶の印明【23-25】を陳ぜよ. 金剛掌を頂上に安んじ, 虚空庫の明を誦し, もって衆聖を供養し【23】, 最勝真実の讃【26】を誦せよ. 次に普賢三昧耶に住し百字の明【46】を誦せよ. また本明を誦せよ. 加持念珠, 正念誦, 大乗現証【47】(割注：或は大楽不空三昧耶真実心【44】の明を誦す). また大印に住し, hūṁの明を誦す. 旋らして八供を陳じ【51】, ならびに空庫讃嘆おはりて, 衆聖を奉送し【31】, 宝印を結びて自身を護す【32】. 拍掌解縛【32】. 即ち起きて四仏を礼し【32】, 随意に経行せよ【32】」.

3) 結節点としての「百字の明」

ここで, 上に挙がる「百字の明」とは「一切所願を速疾に成就せしめる真言である」(八田 1985：168). 文面を掲げるなら,

1338　Oṃ vajra satva samayam anupālaya vajra satva tvenopatiṣṭha dṛḍho me bhava sutoṣyo me bhavānurakto me bhava su poṣyo me bhava sarva siddhiṃ ca me prayaccha sarva karmasu ca me citta śreyaḥ kuru hūṃ ha ha ha ha ho bhagavan sarva tathāgata vajra mā me muñca vajrī bhava mahā samaya satva āḥ.

となる（解析はNo. 1125 の当該箇所に委ねる）.

これはNo. 1122 およびNo. 1125 に載る明であるが，No. 1123 本文には含まれていない．慈雲がNo. 1123 に出ないこの明をあえてNo. 1123 の頸次第の中に出したのは，No. 1122 に含まれていることに鑑み，No. 1123 を，No. 1119 からNo. 1124 までの儀軌全体を集約する頸次第としたい意向を持っていたため，と考えたい．しかしNo. 1123 は頸次第であり，詳注は施せない．そこで慈雲は，No. 1125 本文の方に注を加えている（46-47 頁）．No. 1125 で詳注が施されているのは，勝願（41 頁），大智印真言（42 頁），大楽不空三昧耶真実心密語（45 頁），この百字真言（46 頁），そして大乗現証金剛薩埵真言（47 頁）の計 5 カ所であると言える．これらはすべて，No. 1125 において詳注を施さなければ，No. 1119 では註を加えることのできない印言ということになる．

先に，No. 1122 に盛り込まれる真言が，7 つの儀軌の中で目立って異質であるということを指摘した．この「百字の明」は，そのNo. 1122 に載るのであるが，同時にNo. 1125 にも載る．したがって慈雲は，No. 1122 にしか載らない他の真言とは扱いを変え，かつNo. 1119 からNo. 1124 までの儀軌に含まれる真言という意味において，このNo. 1123 に含めたという考え方ができるだろう．いずれにせよ，この「百字の明」は，金剛薩埵儀軌類と五秘密軌との結節点として機能するものなのである．

4）『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』

では次に，「五秘密軌」の本文を慈雲による注記を含めて翻刻してゆきたい．本稿では，慈雲の目標が「金剛薩埵との合一」に置かれていたという推測を前提に出発する．以下，慈雲による加筆注は≪≫で，また行間注は＜＞で表した．

◎序分

まずは「五秘密軌」に特徴的な「序分」から読んでゆくことにしよう．

「金剛頂経の如き，百千頌十八会の瑜伽あり，頓証如来内功徳の秘要を演ぶ．それ菩薩道を修行し，無上の菩提を証成するとは，一切有情を利益し安楽する

を以て妙道と為す．一切の有情は五趣三界に沈没し流転す．もし五部五密の曼荼羅に入らず，三種秘密の加持を受けず，自らの有漏三業の身を以て，よく無辺の有情を度すといふは，このことはり有るなし．五種の有情は三界の所摂なり．いふ所の欲界色界無色界なり．色無色界に修行の三界の道を出ずるには，別解脱＜戒也＞定慧を以て増上縁と為す．その上二界は，定地の所摂なるに由るが故なり．欲界は禅なければ，是散善地なり．もし修定の軌則有りとも，なほ頭陀苦行を仮借し七方便に依る．根羸劣（ルイレツ）なるに由りて，無学縁覚の果もなほ自ら成し難し．何にいはんや十地大普賢地＜等覚＞，および毘盧遮那三身普光地の位を成ずるをや．二乗の人は，道果を証すといへども，無辺の有情に於て利益安楽を成し作るあたはず．顕教に於て修行する者は，久しく三大無数の劫を経て然る後に無上の菩提を証成す．その中間において十進九退す．或は七地を証し，所集の福徳智慧を以て，声聞縁覚の道果に廻向し，なほ無上の菩提を証する能はず．もし毘盧遮那仏自受用身所説の内証自覚聖智の法，及び大普賢金剛薩埵他受用身の智に依らば，則ち現生において曼荼羅阿闍梨に遇ひ，曼荼羅に入るを得て，羯磨を具足すと為す．普賢三摩地を以て金剛薩埵を引入し，その身中に入る，加持威徳の力に由るが故に，須臾（シュユ）の頃においてまさに無量の三昧耶，無量の陀羅尼門を証すべし．不思議の法を以て，能く弟子の俱生我執の種子を変易し，時に応じて身中に一大阿僧祇劫所集の福徳智慧を集得しつれば，則ち仏家に生在すと為す．その人一切如来の心より生じ，仏口より生じ，仏法より生じ，法化より生じ，仏の法財を得＜法財とは，謂く，三密の菩提心の教法なり＞．わずかに曼荼羅を見れば，能く須臾の頃に浄信す．歓喜の心を以て瞻視（センシ）するが故に，則ち阿頼耶識の中において金剛界の種子を種う．つぶさに灌頂受職の金剛名号を受け，これより後，広大甚深不思議の法を受得し，二乗の十地を超越す」．

「此の大金剛薩埵五密瑜伽の法門，四時に於て＜謂く，晨朝と日午と黄昏と夜半となり＞，四威儀＜謂く，行住坐臥なり＞の中に，無間に作意し修習すれば，見聞覚知の境界に於て，人法二空の執，悉く皆平等にして，現生に初地を証得し，漸次に昇進す. 五密を修するに由りて，涅槃生死に於て染ぜず著せず，無辺の五趣生死に於いて，広く利益をなし，身を百億に分かって諸趣の中に遊んで有情を成就し，金剛薩埵の位を証せしむ」．

「瑜伽者閑静の山林に在り，或は精室に於て，或は所楽の処に随ひて＜或は

輪壇を布いて尊位と為す．華を散じ，諸の供具を陳べ，幡蓋を羅列し，以て荘厳す．皆行人の力に随ひてこれを弁まへよ．しかして修する毎に灌沐し衣を更へよ．まさに道場に入らんとし，身を観ずる等，及び一一の供養の儀則は，大楽軌の中に広く説くが如し．今ただ四威儀の中に於て常に修習し，間あらしめざれ．重複を略去し，その要を簡び，此の法最尊にして上有るなく，諸の三昧を摂す．何を以ての故に．一切如来同一にあつまり，密合し此の五瑜伽を成す．此れを除いて更に別の法有るなし．諸仏入住の処随順し，天龍摂伏して帰命す．故に余印の助を待たずして，即ち一切の三昧を成す．此の理趣最極甚深なり．具に本軌の下文に載る．すべからく尋ね見て，明了にすべし．もし広軌に依りて念誦せば，一切儀式その教えの如くせよ．此の儀を執りて懈怠を生ずるなかれ＞．まさに四方の如来を礼し，身を以て供養し，各々その本真言を誦すべし＜印相及び真言，具に大楽軌に在り．是瑜岐者の常に熟するところなるが故に，重出を須らくせず，已下ただ契の号を標すのみ．皆これに倣へ＞」．

以上「序分」を示したが，ここには「大楽軌」を参照せよとの指示が頻出する．したがって本稿でも後ほど，大楽軌の本文を翻刻して示さねばならない．以下，本文の翻刻を続けることにしよう．

◎大印・心真言

「次に右膝を地に着け，二手金剛拳にて腰の側に安んじ，心舌手の中に於てhūṁ字を想へ＜字義，大楽軌に出るが如し＞．本性清浄なること，満月輪の潔白分明なるが如し．また月輪の上に五智金剛杵を涌成す＜純真金色なり．一切の煩悩を悉く皆摧破す．黄金をとかすが如し＞．浄光明を放ちて法界を照徹すと＜即これ無垢清浄の仏智，不生不滅の金剛なり．また即身五智金剛となるを観ぜよ．体性堅固の故に法界に周徧すと＞」

ここにも「大楽軌」への参照が指示されている．

◎観仏

「次にkhaṁ字を空中に観ぜよ．一切諸仏菩薩集会すと想ひ，并せて本真言を誦せよ＜khaṁ vajra dhātu＞」．

◎金剛起印

「次に金剛起の印を結びて諸仏菩薩を驚覚し，その真言を誦せよ＜oṁ vajro ttiṣṭha hūṁ＞．

金剛起に関しては，№1119の注記中の対応箇所，すなわち普賢行願の前にある（本稿5い）a．参照）．

◎普賢行願

「次に，まさに衆聖に対し，発露懺悔随喜勧請廻向発願すべし＜拳を以て腰に安んじ，閉目運心し普賢行願を誦し，まさに一々の句義を思惟すべし＞」.

ここに，おそらく慈雲が日頃から最も頻繁に誦したであろう「普賢行願」すなわち「五悔」への参照指示が見られる．五悔の詳細については，すでに旧稿で検討した（秋山 2012）.

◎薩埵跏

「次に薩埵跏を結び，まさに定心に住し，盡無余界の有情を縁し，無上正等菩提の真言を誦すべし」.

◎四無量観

以下は，慈雲が割注を付しているように「四無量観」に関わる項目である．これは『理趣経』第 12 段に載る内容であり，「五秘密軌」が『理趣経』を特別に意識して編纂されたであろうことを物語る（福田 1987）.

「次に＜四無量観＞是の思惟をなせ．我まさに金剛薩埵大勇猛の心を発すべし．一切有情如来蔵の性を具せり．普賢菩薩一切有情に徧するが故に，我一切衆生をして金剛薩埵の位を証得せしめんと」.

「また是の思惟をなせ．一切有情は金剛蔵の性なり．未来に必ず金剛灌頂を獲るが故に，我一切衆生をして速やかに大菩薩灌頂地を得て，虚空蔵菩薩の位を証得せしめんと」.

「また是の思惟をなせ．一切有情は妙法蔵の性なり．能く一切の語言を転ずるが故に，我一切衆生をして一切の大乗修多羅蔵を聞くを得て観自在菩薩の位を証得せしめんと」.

「また是の思惟をなせ．一切有情は羯磨蔵の性なり．善能く一切事業を成弁するが故に，我一切衆生をして諸の如来の所に於て広大の供養をなし，毘首羯磨菩薩の位を証得せしめんと」.

◎勝願

次の真言（「勝願」）は№ 1124 もしくは№ 1125 に出る．したがって№ 1125 で詳注を加えたものと推定される.

「また是の思惟をなせ．一切有情既に四種の蔵性を具し四大菩薩の身を獲得す．わが功徳の力と如来の加持力と，及び法界力とを以て，願はくは一切有情速やかに清浄の毘盧遮那仏身を証せんと．真言に曰く」

1672　Oṁ sarva tathāgata＜一切如来＞śaṁsitāḥ＜共に称賛せらる．第六転に呼ぶ．謂く，下の一切の衆生は此の所讃に属するが故に．此の中śaṁsitāḥとは，

śastaは字界なり．もしra字を加はばśāstraにして論なり教なり．今はこれ称賛の義なり．śa字の空点，義深重なり．sa字の女声は所の義の故に，共称讃と云ふところなり．tāのā点は所の義なり＞sarva satvānāṁ＜一切衆生なり．謂く，sarvaは一切なり．satvaは衆生なり．nāṃはこれ衆多の声．諸なり＞sarva siddhayaḥ＜一切成就．yaḥを以て助声に呼ぶ＞sampadyantāṁ＜等願．この中samは等の義．paは助声．dyaṃは与願の義＞tathāgatā＜如来＞ścā＜等なり＞dhitiṣṭhantām＜その加持を為すなり．○謂く，一切如来は共に称賛せられ，一切衆生のために，一切の悉地願は皆成就せよ＞．

続いて五言の四句が引かれているが，これを読み下すなら「金剛掌を遂に合はせ　堅固にして縛しまた陳べ　開心と遍入の印　三昧拳もまたしかり」となるだろう．

なお「金剛掌」については後出「大楽軌」の10-11頁，「開心遍入印　三昧拳」については，11-12頁に対応する．

◎金剛薩埵大智印

「次に金剛薩埵大智印を結へ．真言は是の如く称へよ」．

1353　vajra＜金剛＞satvo＜薩埵なり．此れ有情の義．また勇心の義＞'haṁ＜我なり．上のsatvo左右の点，oऽ相通なり．ऽhaṃ を我と云ふなり．○謂く，我金剛薩埵なり＞．

現在のサンスクリット文法では，satvaḥ ahamが連声してsatvo 'hamとなると解する（辻1974：22）．この'で表される記号はऽ（「アヴァグラハ」）に相当し（辻1974：2），慈雲はその存在を知悉していて，固有の悉曇文字を用いている（「5」のような文字）．「oऽ相通なり」はこの間の経緯を示したものと思われる．

「誦しおへて，我が身金剛薩埵と為ると想へ．首に五仏の宝冠を戴き，身は水精の月の色の如く内外明徹なり．諸の輪鬘繒綵を具し，種々の厳色あり．赤焔を佩（オ）ぶ.右の手に菩提心の五智金剛杵を持し＜此の本来清浄の大金剛，正智を起こしなほ金剛の如くあるを表す．能く我法微細の障を断ずるが故に．擲（ナゲウ）つ勢ひはこれ勇進の義．自他の甚深三摩地をして仏道に順じ，念々昇進し普賢菩薩の地を獲得せしむるなり＞，心の上に按じ＜拳を転じて外に向けるは衆生に示すなり＞，左の手に＜慢印をなすとは，左道左行の有情を降伏させ，順道に帰せしめるをなすなり＞，般若波羅蜜の金剛鈴を持し＜これ適悦の義．鈴の音，振撃し，有情を覚悟す．般若を以て群迷を警（イマシ）めるを表す＞，胯に置き＜大我を表す＞，大月輪に処し，大白蓮華に座す＜明鏡

を敷くが如くにして座す>，容貌凞怡（キイ），大悲愍（アハレミ）を生じ，無盡無余の衆生界を抜済し，金剛薩埵の身を得さしむ．三密ひとしく運びて量虚空に等し．此の三摩地の中に於て一切有情を観ずるに自他別なく同体の大悲なり」.

「五仏宝冠」については 13 頁に対応する.

「瑜伽大智印を持し，相応する由が故に，たとひ若し越法にて具に重罪を造り，并びに諸障を作さんに，彼の大智印を持するが故に，一切供養恭敬す．若し人有りて礼拝し供養し尊重し讃嘆せば，則同じく一切如来及び金剛薩埵を見る」.

◎現智身印

「まさに此の智の印に住すべし．則ち身の前に於て金剛薩埵の智の身を想へ<前の所観は自性法身，今の所観はこれ智身. 法智体無二を顕さんが為なり>. 自身観の如く，四印を以て囲繞す<欲触愛慢>. 薩埵の前に於て欲金剛を想へ. 形服色皆赤，金剛弓箭の印に住す．次に薩埵の右に於て計里吉羅尊を想へ．形服色皆白，二の金剛拳を以て臂を交えて抱印に住す．次に薩埵の後に愛金剛を想へ．形服皆青．右の臂を堅めて摩竭幢を執り，左の金剛拳を以てその肘を承け，また共に二手幢を持す. 次に薩埵の左辺に於て慢金剛を想へ. 形服色皆黄. 二の金剛拳を以て各々胯に安んじ，頭を左に向けて少しく低める．已上は四明妃．各々五仏の宝冠を戴き，輪鬘繒綵種々に厳飾す．同一月輪，同一蓮華<是に深趣有り．具に下の文に載す>．皆薩埵跏を為し，適悦の目を以て薩埵を瞻仰す」.

「瑜岐者，身前の金剛薩埵に専注し，心散動せず．即ち真言を誦し，曰く」

1320　vajra satva <金剛薩埵> āḥ <種子也．如来寂静智也．○瑜祇に云く，能く諸の金剛を召（マネ）くと>.

「此の真言を誦するに由るが故に，金剛薩埵阿尾捨<自身に遍入す>顕現す. 真言に曰く，

1329　vajra satva <同前> dṛśya <見也．謂ふ所の金剛薩埵を見るなり>.

「此の真言を誦するに由るが故に，定中に金剛薩埵を見て，了了分明ならしむ」.

◎四摂種子真言

「即ち前の拳を以て四摂智の契を結び，各その本明を誦せよ」.

234　jaḥ <鈎○如来寂静智を鈎召すと想へ> hūṃ <索○尊の身を智体に引入すと想へ> vaṃ <鎖○能く本尊をして堅固に住せしむと想へ> hoḥ <鈴○能く

諸聖をして皆歓喜せしむと想へ＞.

「此の契を結び明を誦するに由るが故に，金剛薩埵の智身，瑜伽者の定身と交合一体なり」.

◎金剛秘密三昧耶印

「次に金剛秘密三昧耶の印を結び，及び四処を加持し，各々真言一遍を誦せよ」.

この印言については 12 頁に対応する.

◎五仏宝冠印

「次に五仏宝冠の印を結びて五処に安んじ，各々真言一遍を誦せよ．真言に曰く」

1659　Oṃ sarva tathāgatā＜一切如来＞ratna＜宝なり＞abhiṣeka＜我に灌頂したまふなり．後俗声呼＞āḥ＜種子．○謂く，一切如来宝，我に灌頂したまふ＞.

「五仏宝冠印」については 13 頁に対応する.

◎金剛鬘印

「次に金剛鬘の印を結び，繫鬘垂帯し，并びに本明を誦せよ」.

この印言については後出 14 頁に対応する．以下「歓喜印」まで，真言の提示はない.

◎金剛甲冑印

「次に金剛甲冑の印を結び，遍身に擐甲し，并に本真言を誦せよ」.

この印言については後出 14 頁に対応する.

◎歓喜印

「便ち二手を以て旋舞し参差してまさに拍掌すべし．衆聖皆歓喜したまふ」.

この印言については後出 15 頁に対応する.

◎大楽不空三昧耶真実心密語

「次に大智印に住し，大楽不空三昧耶真実心の密語を誦して曰く」

785　Oṃ mahā sukha＜大楽＞vajra satva＜金剛薩埵＞jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ＜鉤索鎖鈴＞surata＜妙適悦なり＞stvam＜生仏一如入我我入の義＞.

「大楽不空三昧耶真実心密語」は，№ 1125 のこの箇所のほか，№ 1124 にも出るが，№ 1119 から№ 1123 には出ない．慈雲は№ 1125 のこの箇所で，次のような字義解釈を展開する．なおこの密語については，№ 1123 に割注のかたちで採りうる選択肢として挙げられている．それは№ 1124 に出ることを考慮したためでもあっただろう.

≪Oṃ は流注なき義なり．流注なしは不生滅の義なり．此の菩薩此に由りて

菩提心を発するが故に，maは我の義．謂ふ所の法界の大我なり．此れ即ち大欲の義なり．hāは因業の義．謂く生仏の因縁和合し大歓喜を生ず．これ触対の義なり．su字の体はsa字．大悲の義なり．蓮華部の種子なるが故に．khaは大空の義．謂く空もまた空にて盡く余等有るなし．これ大慢の義なり．vaは水大なり．謂く大慈悲の水なり．慈に自ら利益衆生の欲有るなり．jraは塵垢を生ず．これ触対の義なり．saはこれ愛著の義．tvaとは．taは真如にして真諦．vaは言説には俗諦．謂く二諦に於て自在を得る，これ傲慢の義なり．jaḥは生の義．菩提の妙華発生するなり．hūṃは風大．風雲起こるに由るが故に，またこれ香気風に随ひて薫ずるが故に．vaṃは無縛の義なり．無縛はまたこれ生死を破除す．謂ふ所の長夜を照破するなり．hoḥは喜の義なり．身に妙香を塗り清涼の楽を得，以て歓喜する義なり．suは諦の義．真俗二部不二一如なる，これ鈎召の義なり．raは塵垢の義．縛住し放れざる塵染の義なるが故に．taは如如の義. 能く真如を証して動転せざる義．これ鎖住の義なり．stvamは入我我入．自他平等生仏一如となる．これ歓喜の義なり. 已上ここに他の請に応じて記す．更に問へ≫.

◎金剛薩埵讃

「次に拳を転じて，まさに四秘密羯磨の印を結び，金剛歌讃を誦すべし」.

「讃王」とも呼ばれる「金剛薩埵讃」(ここでの「金剛歌讃」) は，25 頁に対応する．№ 1119 に詳説があり，慈雲もこちらの№ 1125 では真言等を挙げていない．本稿でも№ 1119 に譲ることにする.

◎五秘密三昧耶印

「次に五秘密三昧耶の印を結へ. 并びに皆羯磨の真言を誦せよ」. 真言は挙がっていない.

以下「薩・欲・触・愛・慢」は行頭行間注である.

薩：「神通寿命．威力相好，金剛薩埵に等同なり」とある.

欲：「能く微細無明住地の煩悩を断ず」.

触：「能く一切受苦の衆生界を抜済し護持して，皆大安楽三摩地を獲しむ」.

愛：「大悲解脱を獲得し，一切有情を憐愍すること，なほ一子の如く，皆抜済安楽の心を起こす」.

慢：「大精進波羅蜜を獲得して，刹那に能く無辺世界の一切如来の所に於て，広大の供養をなす」.

◎大乗現証百字真言

「百字の明」については，すでに本稿前半【2】で言及した．これは№ 1122

および№ 1125 に出る明である．

「次に金剛薩埵三昧耶の印を結へ．印相二手金剛縛にして忍願を合はせ堅めて心上に安んず．大乗現証百字の真言を誦す．曰く」

1338　Oṃ vajra satva samaya＜経に金剛薩埵三昧耶と曰ふ．○即ち堅固有情平等本誓除障驚覚四義なり＞manupālaya＜教に随願守護我と云ふなり．○manuは随なり．a ma相通. 随逐の義．pālaは護なり＞vajra satva tvenopatiṣṭha＜経に云ふ．以て金剛薩埵安住と為すなり．tvaは汝なり．enaは第六転．upaは親近．tiṣṭhaは住なり＞dṛḍho me bhava＜経に為堅牢我と云ふ．dṛḍhoは堅牢なり．u meは我なりと．bhavaは為なり＞sutoṣyo me bhava＜経に，我に於て歓喜せよと云ふなり．sutoṣyoは妙歓喜の義．me bhavaは為我なり＞anurakto me bhava＜anuは随従．raktaは守護なり＞su poṣyo me bhava＜我が為に善く増益せしむ．suは善なり．poṣyoは増益なり＞sarva siddhiṃ ca me prayaccha＜経に，我に一切の悉地を授与すと云ふなり．○maは我なり．prayacchaは授与なり＞sarva karmasu ca me＜経に，及諸事業と云ふなり．○sarvaは諸なり．karmaは事業．su caは等．meは我なり．su caは妙善を兼ねる＞citta śreyaḥ＜経に，我をして安穏ならしむと云ふなり．○cittaは心なり．śreyaḥは吉祥なり．我が心吉祥安穏なり＞kuru＜作なり＞hūṃ＜種子なり．摧破＞ha ha ha ha ho＜咲を告ぐ＞bhagavaṃ＜経に，世尊と云ふ＞sarva tathāgatā＜一切如来＞vajra mā me muñca＜経に，願くは金剛薩埵我を捨離する莫れとなり．meは我なり．muñcaは捨離なり＞vajrī bhava mahā samaya satva＜経に，我今金剛三昧耶の薩埵と為ると云ふ＞āḥ＜種子．金界の種子はvaṃなり．āḥはこれ両部不二の義なり．○謂く，金剛薩埵三昧耶，願はくは随逐守護したまへ．我れ金剛薩埵となり，堅牢の我と為るを以て，我所に於て歓喜し，我所に於て随逐擁護し，善く為に我を増益し，我に一切の悉地，及び諸の事業を授与し，我が心を吉祥安穏にならしめ，我をして歓喜をなさしめよ．世尊一切如来，願はくは金剛，我を捨離することなく，我をして金剛三昧耶の薩埵と為さしめたまへと＞．

この一節に関しては，初めに近いsamaya manupālayaと記した部分について，samayam anupālayaと表記するのが正しいのであるが，縦書きでの悉曇表記でもあり，慈雲はm字を後続の語彙の語頭に付して理解している．ただ前語の語末amと後語の語頭aとが連続するとの意を示すために，慈雲は「a ma相通」と記したものであろう．「相通」という語彙の用法について推測させる部分である．

以下，次の一節が続くが，これは№ 1122 からの引用である（0527b08-

0527b11)．慈雲は，百字真言が№1122 にも出ることを知悉したうえでこの一節を付記している．

「此の加持に由りて，無上菩提もなほ得んこと難からず．何況や諸余の成就をや．たとひ五無間罪を犯すとも纔（ワズカ）に此の真言を誦すればその罪消滅し余有ることなし．何を以ての故に．本尊己が身に堅住するに由るが故に」．

◎大乗現証金剛薩埵真言

続いて，№1125 本来のテキストに戻る．

「即ち金剛薩埵の三摩地に入り，并びに大智印を結びて大乗現証金剛薩埵の真言を誦して曰く」＜或は大楽不空三摩耶真実心の密語を誦せよ＞．

1320　vajra satva＜金剛薩埵＞āḥ＜種子＞．

「或は大智印に住し，数珠を持し，限ることなく念誦せよ＜まさに金剛語を以て念誦すべし．最も相応と為せ＞．疲頓せしむるなかれ．此の三摩地に住するによるが故に，現世に無量の三摩地を証得し，即ち能く金剛薩埵の身を成す」

以下の部分は，№1124（『瑜伽念誦儀軌』）からの補記である．この箇所に関しては，慈雲は№1124 を№1125 で集約しようとしていたことが判る．

≪もし疲倦せば，印を解き全身に金剛合掌し，四礼をなすべし＜初の儀則の如し＞．此を以て憩息と為し，その心をして疲厭せざらしめよ．或はその満月の夜，此の儀則に住し，一夜念誦すれば，晨朝に至りて普賢菩薩来たり，身光月輪の如くその行者を抱き，身より入り支分に遍し，その行者の身普賢菩薩に等同なり．五仏の冠あり．身に天の妙なる瓔珞華鬘を着し，身口意金剛薩埵の如く，所有の親族，彼の人の是の如く威徳を成ずるを見て皆驚愕を生じ恭敬し礼拝せん．彼の人の常に自家に住し大神通をなし，また仏身となりて大神通を現し＜瑜伽経の説に依るに，是の薩埵に堅固と利用と二義を具すなり．二種輪に依りて身を現ずるに異有り．一には正法輪，真実の身を現す．所修の行願報得の身なるが故に．二には教令輪＞，また三世勝金剛身を現し＜大智を起こし，威猛を現ずるに由るが故に，四面八臂＞，難調者を調伏するに＜摩醯首羅，大自在天の魔衆の正法を侵害し，衆生を損害するを摧伏して調伏せしめるが故に，しか云ふ＞，悉く皆調伏す．意に随ひて空に騰（ノボ）り，自在に無量世界に於て諸仏を供養し，天の妙五欲の楽を受け，寿命盡虚空にて無辺の有情を利益し，大利益を成し，毘盧遮那身を成す≫．

◎五秘密

以下，再び№1125 の本文に戻る．五秘密についての解釈が展開される．

「瑜伽者行住坐臥，常に四眷属を以て自ら囲遶せられ，大蓮華同一月輪に処す．金剛薩埵とは，これ普賢菩薩なり，即ち一切如来の長子なり．これ一切如来の菩提心なり．これ一切如来の祖師なり．是の故に一切如来金剛薩埵を礼敬すること，経の所説の如し．金剛薩埵の三摩地を名づけて一切諸仏の法と為す．此の法能く諸仏の道を成す．もし此れを離れて更に別に仏有るなし」．

上の句は『両部曼荼羅随聞記』の中に『五秘密経』からの引用として見られる．

「欲金剛とは，名づけて般若波羅蜜と為す．能く一切仏法に通達し，滞りなく礙（サマタゲ）なし．なほ金剛の能く諸仏を出生するが如し」．

「金剛計里計羅とは，これ虚空蔵の三摩地なり．無辺の衆生に安楽を与へ，無辺の衆生の貧匱（ヒンギ）の泥に溺るる者を拯抜（ジョウハツ）し，所求の世出世間の希願皆満足せしむ」．

「愛金剛とは，これ多羅菩薩なり．大悲解脱に住し，無辺の受苦の有情を愍念し，常に抜済を懐き，安楽を施与す」．

「慢金剛とは，これ大精進波羅蜜なり．無礙解脱に住し，無辺の如来に於て広く仏事をなし，及び衆生の利益をなす」．

◎五智

以下，五智を釈し，五尊に配する．

「欲金剛，金剛の弓箭を持し，阿頼耶識の中の一切の有漏の種子を射て，大円鏡智を成す」．

「金剛計里計羅，金剛薩埵を抱くは，第七識の妄りに第八識を執り我癡（ガチ）我見我慢我愛と為るを浄めて平等性智を成すを表す」．

「金剛薩埵大智印に住すとは，金剛界より金剛鈴菩薩に至る，三十七智を以て自受用他受用果徳の身を成す」．

「愛金剛とは，摩羯幢を持す．能く意識の遠慮を浄めて浄染有漏の心に於て妙観察智を成す」．

「金剛慢とは，二の金剛拳を以て胯に置く．五識質疑の身を浄めて大勤勇を起こし，盡無余の有情を皆頓（ニハカ）に成仏せしめ，能く五識の身を浄めて成所作智を成すを表す」．

◎五眼

続いて以下，五眼を釈し，五尊に配する．

「欲金剛とは，これ慧眼．染浄分の依佗性を観察し，一切法非有非無なりと知る」．

「金剛計里計羅とは，無染智＜法眼なり＞を以て，浄分の依佗＜四智＞と，

果徳の中の円成と，不即不異を観察し，一切法と菩提涅槃と不即不異を知る」.

「金剛薩埵とは，これ自性身＜仏眼＞．不生不滅にして量虚空に同じなれば，則これ遍法界の身なり」.

この句は『両部曼荼羅随聞記』の中に，『五秘密経』からの引用として見られる句である.

「愛金剛とは，大悲天眼を以て一切有情身中の普賢の体不増不滅を観見す」.

「金剛慢とは，清浄無礙肉眼を以て一切有情，異生の位に処在し塵労覆蔽すといへども，本性清浄なり．もし大精進と相応すれば，即ち離垢清浄を得ると観ず」.

◎五秘密二十五尊

以下，五秘が即ち二十五尊に他ならないことが説かれる.

「金剛薩埵とは，これ毘盧遮那仏身．欲金剛はこれ金剛波羅蜜．計里計羅はこれ宝波羅蜜．金剛愛はこれ法波羅蜜．金剛慢は，これ羯磨波羅蜜なり」.

「金剛薩埵とは，即ち彼の薄伽梵阿閦如来．欲金剛とは，即ちこれ金剛薩埵．計里計羅とは，即ちこれ金剛王．愛金剛とは，即ちこれ金剛愛．金剛慢とは，即ちこれ金剛善なり」.

「金剛薩埵とは，即ち彼の薄伽梵宝生如来．欲金剛とは，即ちこれ金剛宝．計里計羅とは，即ちこれ金剛日．愛金剛とは，即ちこれ金剛幢．金剛慢とは，即ちこれ金剛笑なり」.

「金剛薩埵とは，即ち彼の薄伽梵観自在王如来．欲金剛とは，即ちこれ金剛法．計里計羅とは，即ちこれ金剛利．愛金剛とは，即ちこれ金剛因．金剛慢とは，即ちこれ金剛語なり」.

「金剛薩埵とは，即ち彼の薄伽梵不空成就如来．欲金剛とは，即ちこれ金剛業．計里計羅とは，即ちこれ金剛護．愛金剛とは，即ちこれ金剛薬叉．金剛慢とは，即ちこれ金剛拳なり」.

◎八供四摂

『五秘密軌』は原則として 17 尊に言及しないのであるが，以下では内・外の計八供養，および四摂に触れている.

＜八供＞

「内の四供養とは，即ち彼の四眷属，外の四供養とは，また彼の四眷属なり」.

＜四摂＞

四摂とは，鈎索鎖鈴を指す．四門菩薩とも言う（22 頁）.

「欲金剛とは，菩提心の箭を以て一切有情を鈎召し，仏道に安置す．計里計羅の抱印を大悲方便の金剛索と為す．不染智を証せしむ．愛金剛の摩竭幢を以て大悲の金剛鎖と為し，無量劫を経て生死に処すれども心移易せず，一切衆生を度するを以てその道と為す. 金剛慢とは，大精進を以て般若の金剛鈴と為し，無明の窟宅に在る随眠の有情を警悟す」.

◎四大品

以下，金剛頂初会四大品を約して釈す.

「普賢曼荼羅は五身を離れず．降三世曼荼羅は即ち金剛界に同じ．蓮華部は遍調伏曼荼羅なり．此れに依りて之に例するに，宝部は一切義成就，また此の説に同じ」.

◎五部

また，五部を約して釈す.

「金剛薩埵の五密を如来部と為す，即ちこれ金剛部．即ちこれ蓮華部．即ちこれ宝部＜羯磨部を略す＞．五身同一大蓮華とは大悲の義となり，同一月輪円光とは大智の義となる．是の故に菩薩，大智に由るが故に生死に染せず，大悲に由るが故に涅槃に住せず．経の所説の如くには三種の薩埵有り．謂ふ所の具薩埵，智薩埵，金剛薩埵なり」.

「金剛薩埵を以てその二種の薩埵に簡ぶ，修行の此の金剛乗を得たる人を，即ち金剛薩埵と名づく．是の故に，菩薩勝慧の者は，乃至生死を盡すまで，恒に衆生の利をなして涅槃に趣かず. 何等の法を以てか能く此の如きことを得る．是の故に般若及び方便，智度悉く諸法及び諸有を加持し，一切皆清浄ならしむ. 諸法及び諸有をば，名づけて人法二執と為す. 是の故に欲等世間を調して，浄除を得さしむが故に，有頂及び悪趣，調伏し諸有を盡す．虚空蔵の三摩地に住するに由る．人法二執に於て皆平等清浄なる，なほ蓮華の如しと悟る．是の故に蓮性の清浄にして，もと垢の為に染せられざるが如く，諸の欲の性もまた然り．不染にして群生を利する者，安楽利益の事をなし，大自在の位に居す．是の故に，大欲清浄を得，大安楽富饒にして三界に自在を得，能く堅固利益をなす者なり. 菩提心を因と為す，因に二種有り. 無辺の有情を度すを因と為し，無上菩提を果と為す．また次に大悲を根と為す，兼ねて大悲心に住すれば，二乗の境界の風も動揺能はざる所なり．皆大方便に由る．大方便とは，三密金剛を以て増上縁と為し，能く毘盧遮那清浄の三身の果位を証す」.

金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌　畢

以上が『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』の全文である．末尾の一節では，いわゆる「三句の法門」として知られる『大日経』住心品第一からの一節「菩提心を因とし，大悲を根とし，方便を究竟とす」が意識されている（宮坂宥勝 2011，30-31）．慈雲は『両部曼荼羅随聞記』の中で，胎蔵曼荼羅に関して「中台の大日尊を菩提心とし，四仏・四菩薩を大悲の表れとし，外三院を方便とする」解釈を展開しているが，これは『大日経疏』住心品第一に見られる解釈に則ったものである（宮坂 2011，243 以下；小峰 2016，67）．

以下に跋文がある．

≪我某甲，一切衆生を救度せんが為の故に，無上菩提心を発す．三十七品助道の法門，乃至六波羅蜜に於て誓願を具足し無間に修行せん．我が積集する所の善根をば，悉く皆一切衆生に廻向す．願はくは我及び一切衆生，皆甚深の法門を証悟することを得ん．心浄く広大なる，なほ虚空の如く，無功用を以て，自在に能く無量の仏事を弁へ，平等大悲種々の方便を以て一切衆生を調伏し利益し，皆無余涅槃に入るを得さしめ，仏の十力無畏不共法等に於て，願はくは我衆生とともに悉く皆同じく得んことを≫＜右発願の文，金剛頂瑜伽中略出念誦法経に出たり＞．

略出念誦経とは大正大蔵経№ 866『金剛頂瑜伽中略出念誦經』を指す．同経には「我某甲」から「悉皆同得」までの願文のすべてが載る．

≪此の中，梵釈いまだ詳悉（ショウシツ）ならず．別に釈義有り≫．享和壬戌

こうして，1802 年成稿の「金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌」は閉じられる．

5）『金剛薩埵修行儀軌私記』

あ）筑波大学附属中央図書館所蔵『金剛薩埵修行成就儀軌』

題目の下に「海仁珎」と付記されている．これはおそらく，この儀軌書を請来したのが「空海，円仁，円珍」である，との意を記したものであろう（珎＝珍）．以下に冠注部分を書き出しておく．

1丁左　序分帰敬　正宗分　受灌頂若許可　揀択勝処　建立輪壇　并　羅列聖位

2丁右　弁諸供具　洒浄香水　入勝三世三昧　以焼香薫供具　安置本尊像　并　随力弁設荘厳

修法時分　随処念誦

左　潔身浄服　或以法浄除　初入道場　并　本尊観　至道場門観　対曼荼羅面西或東　初礼於四仏

3丁右　東方　南方

左　西方

4丁右　北方　薩埵跏　発菩提心観　并　自性成就真言

左　無自性観　并　薩埵観　是即　五相成身也

5丁右　大智印　并　心真言　薩埵儀形義述　khaṁ字観是即観仏

左　金剛起　五悔

6丁左　金剛掌　金剛縛

7丁右　開心門　金剛遍入

左　金剛拳三昧耶

8丁右　金剛慢印　金剛秘密三昧耶　五仏宝冠印　以印安五処即五仏灌頂　印義述

左　中　東　南　西　北

9丁右　鬢灌頂　偏身被甲

左　二字観　加持十三処　拍掌

10丁右　大智印　観冠中五仏本威儀　召請　是極喜印　誦真言三返或四返

11丁右　献閼伽　初用唵字句加持之

左　献閼伽真言　十七聖観　初観尊形　而後結誦印明　金薩

12丁右　○四明妃　欲　初明尊形次述其義後説印明，已下皆尓　触　抱持五股杵也是即三昧耶体

左　愛　慢　○四内供　　春

13丁右　雲　秋　冬

左　○四外供　嬉　　笑

14丁右　歌　舞　○四摂　　鉤

左　索　鎖　鈴

15丁右　十七聖三昧耶印皆用　前羯磨明　金薩　○四妃　欲

左　触　愛　慢　○四内供　華　香　燈　塗　○四外供　嬉

16丁右　笑　歌　舞　○四摂　鈎　索　鎖　鈴　金剛歌讃　用四妃羯磨印
　　左　欲　触　愛　慢
17丁右　又讃　已下一段　皆以眼作異相故，始総標眼印也　中央薩埵　慢印儀　○四妃　欲
　　左　触　愛　慢　諸本尊　遍入身中
18丁右　作盡身心　愛染印　金剛熾盛日三昧耶　是即結方隅界　供養　以自勝解意成之　或有現供物　用此真言加持之
　　左　住大智印　念誦　皆準初観　供養　一百八名讃
20丁右　献閼伽　諸尊羯磨　并　三昧耶印　或単　陳八供羯磨印明　解界
　　左　奉送　宝印　亦成被甲也
21丁右　拍掌　四礼　如初　経行　読経　毎日四時　誦十万返　略念誦法　菩提心観　住大智印　依初観
　　左　金剛秘密三昧耶　五仏灌頂　鬘灌頂　八供養　五秘密羯磨印明　供養　念誦　住大印
22丁右　○敬愛法

筑波大所蔵本（以下「筑波大本」）の冒頭には「帰命礼普賢　金剛勝薩埵　法界真如体　我今依大教　金剛項勝初　略述修行儀　勝初金剛界　海会諸聖衆　垂慈見加護　利益修行者　是故結集之」という，五言による頌が記されている（「金剛勝薩埵」のみ加筆；すなわち元来は十句より成る部分である）．これは№1123『金剛項勝初瑜伽普賢菩薩念誦法』（「勝初軌」）の冒頭部に他ならない．一方『慈雲尊者全集』（以下『全集』）に載る『金剛薩埵修行儀軌私記』の冒頭は，№1119『大楽金剛薩埵修行成就儀軌』（「大楽軌」）の冒頭部から 2 行ばかりを引いたものである．以下に書き下し文で示す．

「金剛薩埵，よく金剛三密門を説きたまへるに帰命するは，真言行を修するの菩薩，勤苦を受けず，安楽に相応し，妙方便をもって速疾に成就せんが為なり」．

ところが『全集』にあっても，その後に続く部分は「勝初軌」からの五言頌の引用に替わり，慈雲はその頌に割注を加えるというスタイルを採る．以下，＜＞で囲った部分が慈雲の割注であり，「勝初軌」からの引用は，『慈雲尊者全集』に載る訓点に従って書き下してある．一方「筑波大本」にも同じテキストが引かれるが，もとよりこれは，上掲の「是故結集之」に続く五言頌である．

下の「羅列諸聖位」以下に続く部分は，『大蔵経』に挙がるテキストとしては確認できておらず，慈雲が用いた「金剛薩埵儀軌」類に固有の文面であって『大蔵経』には容れられなかった異本であるのかもしれない．

い）慈雲尊者全集所収『金剛薩埵修行儀軌私記』

では，上に「速疾に成就せんが為なり」以下に続き「五悔」に至るまでの「大楽軌」のテキストについて，あくまでも慈雲所依のものを書き下してみたいと思う．諸般に鑑み，テキストは『全集』によることにする．

a. 序分から普賢行願まで

「もし解脱を求めんと欲せば，阿闍梨に依りて，灌頂を受くことを求むべし．もし許可を得おはらば，まさに本教に依りて修せよ．揀択の勝処を得て＜閑静の山林にあり，或は僧伽藍に於てし，或は精室の中に於てし，その所楽の処に随ふ＞．輪檀を建立し＜方円大小その意に随へ＞」．

「諸の聖位を羅列し」＜中央は九位．外院は更に一重を加ふ．中央に金剛薩埵を安んじ，薩埵の前に依りて欲金剛を安んじ，右辺に髻離吉羅を安んじ，後に愛楽金剛を安んじ，左辺に慢金剛を安んじ，右辺の前の隅に春金剛を安んじ，右辺の後の隅に雲金剛を安んじ，左辺の後の隅に秋金剛を安んじ，左辺の前の隅に霜雪金剛を安んず．次の外院をもって前の如く次第に四隅に安布せよ．初めに嬉戯金剛を安んじ，次に笑金剛を安んじ，次に歌金剛を安んじ，次に舞金剛を安んぜよ【内四供養】．外院の前に金剛鈎を安んじ，右に金剛索を安んじ，後に金剛鎖を安んじ，左に金剛鈴を安んぜよ【四摂；ちなみに外四供養は香華灯塗】．一々の儀形下の文に広く明かすが如し．もし十七菩薩の本形を書かば即ち大曼荼羅と成る．もし本聖者の執持する所の標幟を書かば即ち三昧耶曼荼羅と成る．もし衆聖の一々の種子の字を以て各々の本位に書かば即ち法曼荼羅と名づく．或は各々その本形を鋳て本位に安んずれば，即ち羯磨曼荼羅と成る．或は但だ縄を以てこれをつなぎ，各々その中心に於て聖位を布置し，なほ満月の如くし，或は八葉蓮華に似せ，以て賢聖の位と為すのみ＞，

「時華を散じて荘厳し，賢瓶閼伽水焼香華塗香燈明及び飲食，新浄の器を以て盛り，真言を以て香水を灌ぐべし」＜まさに三世勝金剛三摩地に入り，本真言及び手印を以て加持し，よく諸々の供具に灌洒すべし＞．

以下，冠注が続く．

＜まさに印を結ばんとする時は，まさに自身を観ずべし．此の尊青色にして狗牙上に出て，火髪上に聳へ，髑髏を冠とし，三目威怒の相なり．右の手に五股杵を持し，左は拳に作り腰に安んぜよ＞．

さらに割注が続く．

＜その印相は二手各拳と為し，その風指を堅めてその空指を屈し，掌内に入れ，地水火の三指を以てこれを押す．即ちその印を成す．定拳を以て心の上に置き，智拳を以て香水に触れよ．真言に曰く．Oṃ niśumbha vajra hūṃ.或は単にhūṃの明を誦するもまた得．○凡そ持誦の処に於て諸の香花飲食等を奉献せば，則穢触及び作障者を除遣す．事に臨んで要すすべからく一々に皆此の真言を誦し，印を以て諸物に触れて護持すべし．諸々の供養に於て能く成就の諸の障難なからしめ，乃至方隅を結するには，右転三遍及び上下結界を成せよ．自身を護するにはまたその五処を加へれば即ち成す＞．

以下，本文に戻る．

「また焼香を以て薫じ，壇の四辺に陳設せよ．もし本尊の形像有らば，壇の中に面を西にして安んぜよ＜或は東＞．或は力の弁ずる所に随ひて，上妙の天蓋を上施し，周帀（シュウソウ）に悉く旛を懸け，殊鬘鈴珮等，間錯して垂れて供養せよ＜已上建壇厳具の法，備に本教の中に在り＞．およそ此の法を修せんと欲すれば，四時或は三時，二時乃至一，無間一切時に＜三は晨午昏を謂ふ．夜半を加へて四を成す．二時は晨暮を謂ふ．一時は暇を得るに随ふ＞，或は壇無き浄室に，処に随ひて念誦をなすべし．時方処有るなし，その所楽の処に於て，まさにraṃ字を観ずべし．身を浄め及び処を浄むべし．次に虚空の中に於て，a字を観じ，殿と成すべし．また宝殿の中に於て，その曼荼羅を観ぜよ．中央に本尊を安んじ，眷属皆囲繞す．種々の供養具，法界所有の物，皆悉くその中に満せよ．これ仏不空の体なり」．

「およそ念誦せんと欲する時は，常に身を潔め服を浄め，内外において垢なからしむ＜内は謂ふ所の六根．三密を用ひて浄除す．外は諸の儀則を謂ふ．法香水灌沐す＞．或は外縁備らずんば，即ち法を以て浄除せよ．此の理趣寂勝なり．まさにraṃ字を観念し，内外の垢を浄除すべし．しかも浴せず浴するに成る．常服も浄衣に当たる．蕩除さること虚空に等しく，無垢なること法界の如く，事理倶に相応す」

＜まさに浄法界三摩地に入るべし．二手各金剛拳をなし，二頭指を舒べて側相拄（ササ）へ，印を頂に安んじ，その印の中に於てraṃ字を置き，口に誦し心に念ぜよ．その色皓白（コウハク）なり．頂及び遍体，三角の智火と為り，

普く一切有情界を照らす.日の初めて出づる時の如く，虚妄の煩悩を焚き盡し，清浄なること虚空の如し．自身及び有情，同一法界にして差別有るなし．何を以ての故に．一切法本来清浄にして垢染なし．諸法清浄の故に，染浄不可得なり．纔（ワズカ）に此の三昧に住するが故に，無始の積罪頓（ニハカ）に滅して余有るなし．○凡そ疑ふ所不浄．皆此の字を観じて焚け．此の加持力に由りて，所浄法界の如し＞.

「初めて道場に入る毎に，まさに本尊観に住すべし．行歩蓮華を践（フ）む＜身語意を運用すること，下の文に広く明らかな如し＞．道場の門に至りて弾指して三たびhūṃと称し，門戸を開きて即ち入る」

以下冠注が続く．≪或は薩埵の儀則に住しおへて，右の目にma字を置き，左の目にṭa字を置く．右は日左は月．金剛の光を流す．門に入りて顧視すれば，諸魔ことごとく消散す.本尊を瞻仰し歓喜の我施を称賛す.諸の供具を瞻覩（サント）すれば，垢を去って清浄と成し，次に左拳を以て心に当てて頭指を竪（タ）つ．右拳もまた然り．頂上に三たび左旋して，空及び下界を指さす．また右に旋転しまた一々の供具を指さす．皆hūṃの字明を誦す≫＜已上冠註＞.

「まさに曼荼羅に対し＜面東或は西に向かふ．随ひてその穏便を取る＞，端身正立して金剛合掌をなすべし．仏を常に世に住し給ふと想ひて，深く欣楽の心を生じ，四方の如来を礼し，身を以て供養し本真言を誦せよ．身を捨つるに由るが故に，則ち三業有漏之体に於て則ち三世無礙律儀を受くるを成す」.

以上の慈雲による注記は『理趣釈』上巻・大楽不空金剛薩埵による初集会の終部に相当する（「次に，安立の次第を説いて曼荼羅位を分かつ」以下；宮坂2011：366「大楽不空真実修行瑜伽儀軌」）．これは宗叡請来の初会十七尊曼荼羅（大楽曼荼羅）の像と一致する（松長2006：97，宮坂2011：図3）.「十七尊曼荼羅は，般若と方便の双修による大乗の修行を完成することによって得られる金剛薩埵の大楽の境地を，十七尊に開いて表現したものであり，この構成は，金剛界大曼荼羅の省略形である四印曼荼羅のそれを踏まえたものであった」（川崎2007：469-470）とされるが，「般若と方便」は「大智と大悲」とも表現され，特に両者の不二を説くのが「五秘密軌」である.

以下の「四礼」については，№1122に載るものの№1119には挙がらない．慈雲はこの「四礼」に関する解説を№1119の冒頭に含めているが，以下の四礼の印言は，栂尾祥雲『秘密事相の研究』（栂尾1943：324-326）にも引かれ，

解説を施されていて，現在にまで東密の伝承に息づいているものである．したがって№1122 を特異化する意味はない．ここで慈雲は，№1122 をも「金剛薩埵修行儀軌」のうちに取り込もうとしていると言えよう．

◎東方如来礼

「すなはち，長く二臂を項上に舒べ，金剛合掌し，長く二足を展べ，全身を地に委ね，真言を誦し，東方不動如来を礼し，身を以て奉献せよ. 真言に曰く」

1651　Oṁ＜三身の義．敬礼の義．供養＞sarva tathāgata＜一切如来なり．第三転に呼ぶ．即ちこれ奉献の境なり＞pūjo＜経に云ふ，供養＞pasthānāyā＜経に承事と云ふなり．pūjo はこれ供養．j の点は o なり．o ऽ 相通ず．ऽpasthānāya は承事と云ふ．āya は第四転に呼ぶ＞tmānāṁ＜経に ātma 己身と云ふなり．上の yā の字の引点を ā と為すなり．nāṁ はこれ衆多の声＞niryāta＜経に奉献と云ふなり＞yāmi＜経に我今と云ふなり．上に通じ，まさに我今己身を奉献し供養承事を為すと云ふ＞. sarva tathāgata＜一切如来なり．第三転に呼ぶ＞vajra satvā＜金剛薩埵＞dhiṣṭhā＜経に，adhiṣṭha 守護と云ふなり．上の tvā 字の引点を即ち以て a と為すなり＞sva māṁ＜経に，於我と云ふなり．案ずるに自の義なり＞, hūṁ＜種子＞.

上の一節に関して，pūjo pasthānāyā と記した部分，pūja upasthānāyā の連声に関して，現代のサンスクリット理解では pūjopasthānāyā と連続表記するのであるが，慈雲は pa 字の前に ऽ（アヴァグラハ）を介して理解している．この点に関しては 4）「金剛薩埵大智印」(1353) の項に注記した．「o ऽ 相通ず」とはこの間の経緯を表したものであろう．

「この如くの念をなすべし．一切如来に承事し供養せんと欲ふが為の故に，我いま己が身を奉献す．ただ願はくは一切如来金剛薩埵，我を加護したまへと」.

◎南方如来礼

「また二足を斂（オサ）め，金剛合掌を以て心の上に置き，額を以て地に着け，真言を誦し，南方宝性如来を礼し，身を以て奉献せよ．真言に曰く」

1650　Oṁ sarva tathāgata＜一切如来なり．第三転に呼ぶ．即ちこれ灌頂奉献の境なり＞pūjā＜供養＞bhiṣekāyā＜経に為灌頂故と云ふ．ja 字の引点は即ち a なり．abhiṣekā は灌頂と云ふなり．yā 字及び kā 字の引点は即ち第四転の爲声なり．故に爲灌頂と云ふなり＞tmānaṁ＜己身なり．上の字の引点を以て ā と為す．上に同じ＞niryāta＜奉献＞yāmi＜我今＞sarva tathāgata＜一切如来＞vajra ratnā＜金剛宝＞bhiṣiñca māṁ＜灌頂我なり．tnā 字の引点は即ち a なり．abhiṣiñca 灌

頂と云ふ．maはこれ我と云ふ．経に願与我灌頂と云ふ＞, trāḥ＜種子＞.

「この如くの念をなすべし．一切如来を供養し灌頂を求請せんと欲ふが為に，我いま己が身を奉献す．願はくは一切如来金剛宝を以て，我に灌頂を与えたまへと」.

◎西方如来礼

「また金剛合掌を以て頂上に置き，口を以て地に着け，真言を誦し，西方無量寿如来を礼し，身を以て奉献せよ．真言に曰く」

1653　Oṁ sarva tathāgata＜一切如来なり．第三転．即ちこれ展転供養の境なり＞pūja pravartanāyā＜展転供養を為すなり＞tmanāṁ＜己身なり．anāṁは衆多の声なり＞niryāta＜奉献＞yāmi＜我今＞sarva tathāgata＜一切如来＞vajra dharma＜金剛法＞pravartayāmāṁ＜我が為に転ずるなり＞, hrīḥ＜種子＞.

「この如くの念をなすべし．我今一切如来を展転供養せんが為の故に，己が身を奉献す．願はくは一切如来我が為に金剛法輪を転じたまへと」

◎北方如来礼

「また金剛合掌を以て心の上に置き，頂を以て地に著け，真言を誦し，北方不空成就如来を礼せよ．真言に曰く」

1652　Oṁ sarva tathāgata＜一切如来なり．第三転に呼ぶ．謂く事業の所供養なり＞pūja＜供養＞karmāṇi＜事業なり．衆多声に呼ぶ＞ātmanāṁ＜己身なり＞niryātayāmi＜我今奉献＞sarva tathāgata＜一切如来＞vajra karma＜金剛業＞kuru＜なすなり．二言声に呼ぶ＞māṁ＜我なり．経に上に合し，為我作金剛事業と云ふ＞, aḥ＜種子＞.

「この如くの念をなすべし．我れ今一切如来を供養し事業をなさんが為の故に，己が身を奉献す．願はくは一切如来我が為に金剛事業を成就せしめたまへと」.

◎自性成就真言

「次に薩埵跏を結び，端身に支節を定め，左の手を跏の上に仰げ．右の手を仰げて左の手の上に安んずべし．まさにかくの如き心を起こすべし．我まさに心地を開き，誓ひて菩提心を退転せず，盡無余界の一切衆生を安楽し利益すべし．此の心を成就せんが為の故に，まさに自性成就の真言を誦すべし．曰く」,

1735　sarva＜一切＞yoga cittam＜相応心なり＞utpādayāmi.＜発起なり．自説声に呼ぶ．○謂く，我れ一切の瑜伽心を発起す＞.

「わずかに此の心を発し真言を誦するに由るが故に，一切の障を断じ一切の

安楽悦意を獲り，諸の魔衆及び調伏し難き有情，阻礙する能はず．正覚に等同し，まさに人天の広大供養を受くべし」.

「次に一切法自性なしと観ぜよ＜幻の如く陽焔の如く，夢の如く影像の如し．声響の如く光影の如く，水中の月の如く変化の如く，虚空の如し．この観をなしおはれば，この心染にも浄にも通じて無礙なること．なほ虚空の如し＞．即ち已（スデ）に菩提心を修すと名づく＜その心中，胸臆の間に当たる＞．観ること，なほ満月の潔白分明なるが如し＜心水澄浄なることを得れば，菩提心の月影その中に現ず＞．また想へ，月輪の上に於て五鈷金剛杵を涌成す＜純真金色なり．一切の煩悩悉く皆摧破すること黄金を鎖するが如く然り＞．光明瑩徹す＜即ちこれ無垢清浄の仏智．不生不滅の金剛なり．また即身五鈷金剛杵と成り虚空に遍満し，諸仏悉く金剛の中に来入し，合わせて一体と為り，己の身の三業成ること，金剛の如しと観ぜよ．この観をなす時，金剛周し法界に亘るとまた観念せよ＞.

◎大印・心真言

「その金剛，変じて金剛薩埵と為る．首（コウベ）に五仏の宝冠を戴き，身は水精の月の色のごとし．内外明徹なり．諸の輪鬘繒綵種々の厳飾を具し，身に赤焔を佩（オ）び，白蓮華の上に処す」＜明鏡を敷きて坐すが如し＞.

「次に大印及び心真言を以て加持をなせ．印相，二手各々金剛拳を結び，左は胯に置き＜これ大我を表す.慢印をなすとは，左道左行の有情を降伏せしめ，順道に帰せしめんが為なり.般若波羅蜜の金剛鈴を持する，これ適悦の義なり．鈴音振撃の有情を覚悟す．般若を以て群迷を警むるを表するが故に＞，右の輪は＜菩提心五智の金剛杵を持す．此れ本来清浄法界の大金剛輪なり．正智を起するは，なほ金剛の如くなるを表す．能く我法微細の障を断ずるが故に＞，擲（ナゲウ）つ勢にして＜これ勇進の義なり．自他の甚深三摩地をして仏道に順じ，念々昇進して普賢菩薩の地を獲得せしむるなり＞，心の上に安（オ）く＜拳を転じて向かはば外の衆生に示すなり＞．身口意金剛の如く，端身正坐し心真言を誦し＜これ即ち大楽金剛不空三昧耶本誓の心なり＞，曰く」

1882　hūṁ＜因の義なり．謂く，菩提心を因と為す，即ち一切如来の菩提心なり．またこれ一切如来不共真如の妙体恒沙の功徳皆此れより生ず＞.

この部分については，先の 4)「大智印」に見えた 42 頁の句「首に五仏の宝冠を戴き，身は水精の月の色の如く内外明徹なり．諸の輪鬘繒綵を具し，種々の厳色あり．赤焔を佩（オ）ぶ」がこの句を基礎にしていることが明瞭である．同頁には「胯」が＜大我を表す＞となっていたのも想起されよう．また「擲（ナ

ゲウ）つ勢にて」以下の部分，＜これ勇進の義．自他の甚深三摩地をして仏道に順じ，念々精進し普賢菩薩の地を獲得せしめるなり＞は 42 頁と同文である．

◎観仏

以下は一段下げとなっている．実際，次の観仏印は№ 1119 に載らず，№ 1123 に載るのみであり，慈雲による№ 1123 の頸次第にも言及されている．慈雲はこの№ 1119 の中で注解を行っている．

≪また khaṁ 字を観じ，頂上に安ぜよ．白色にして大光明を放ち，遍く十方一切世界を照らす．その字の実相の義を思へ．謂ふ所の一切法虚空に等同にして諸の色相を離れ，諸の障礙を離れたり．則ち真実の理の中に於て，無量の諸仏の身を現すこと，なほ恒沙の如し．諸の相好を具し，皆法界定に入る．即ち遍照の明を誦し，歴然として尊容を瞻仰す．真言に曰く≫

168　khaṁ＜種子なり．謂ふ所の一切法，虚空に等同にして，諸の色相を離れ，諸の障礙を離れたり．則真実の理の中に於て，無量の諸仏の身を現すなり＞，vajra dhātu＜金剛界なり．界は性なり．自性法界堅固不壊なるを謂ふなり＞．

◎金剛起印

この段も一字下げである．№ 1119 から№ 1125 までの儀軌の中では，先に本稿 4）に見たように，№ 1125 にも出ていた．

≪次に金剛起の印を結へ．前の二拳を以て檀慧を鉤し，進力側めて相ひ拄（ササ）へ，三たび挙げて鉤の勢いの如くし，真言を誦し，諸仏を驚覚す．一たび挙げて一たび誦せよ．まさに此の思惟をなすべし．諸仏寂静の味を貪せず，悉く定より起きて集会に赴き，我を観察して同じく摂受したまふ．我れまた聖衆の前に住し，礼事し供養すと．真言に曰く≫

1497　oṁ vajro＜金剛＞，ttiṣṭha＜起なり．左右の点 o ऽ 相通なり．uttiṣṭha ここに起と云ふなり＞，hūṁ＜種子なり．○謂く，起とは行の義なり．無畏三蔵云はく，起とはこれ，入定の諸仏を驚覚するの義なり＞．

この部分に関しても，先に 5）a「1651　東方如来礼」の所に注記したのと同様に，vajra uttiṣṭha の連声による表記 vajrottiṣṭha に関して，慈雲は o の後に ऽ を介して理解し，「o ऽ 相通なり」と注記したものと思われる．

◎普賢行願【五悔】

「即身心動揺せず，定中に諸仏を礼す．まさに普賢行願を誦して最勝覚を求むべし」＜二拳を両胯に安んじ，閉目運心してまさに一々の句を思惟すべし＞．

「二拳を両胯に安んじ，閉目運心してまさに一々の句を思惟すべし」とは，40 頁にあった「普賢行願」を唱える際の注意事項と同趣旨である．

《合掌》

帰命十方一切仏　最勝妙法菩提衆　以身口意清浄業　慇懃合掌恭敬礼
無始輪廻諸有中　身口意業所生罪　如仏菩薩所懺悔　我今陳懺亦如是
我今深発歓喜心　随喜一切福智聚　諸仏菩薩行願中　金剛三業所生福
縁覚声聞及有情　所集善根盡随喜　一切世燈座道場　覚眼開敷照三有
我今胡跪先勧請　転於無上妙法輪　所有如来三界生　臨般無余涅槃者
我皆勧請令久住　不捨悲願救世間　懺悔随喜勧請福　願我不失菩提心
諸仏菩薩妙衆中　常為善友不厭捨　離於八難生無難　宿命住智荘厳身
遠離愚迷具悲智　悉能満足波羅密　富楽豊穣生勝族　眷属広多恒熾盛
四無礙弁十自在　六道諸禅悉円満　如金剛幢及普賢　願讃廻向亦如是

筑波大所蔵の筆写本冠注には，この部分に関して「五悔」とある．『密教大辞典』によれば（密教大辞典編纂委員会 1931：581）「五悔は金剛界果徳五智にちなむがゆえに，金剛界法の行法次第にこれを用いる」とある．至心による帰命・懺悔・随喜・勧請・回向を言う．『華厳経』に由来する普賢十大願とは，開合の不同にして法体は同一であるとされる．

b. 普賢行願以降

以下「大楽軌」に出る真言を中心に見てゆこう．印を見出しに用いる．

◎金剛合掌印

「次に金剛合掌印をなすべし．印相は，堅固拳にて指の初分を交へよ．諸の三昧耶皆此れより出生す．真言に曰く」

1430　vajrāṃ＜金剛＞jali＜合掌なり．○謂く，金剛合掌なり＞．

「此の印を結ぶが故に，十波羅蜜を円満し，福智の種を成就す」．

◎金剛縛印

「次に金剛縛の印を結へ．印相は，金剛掌を以て便ち深く交へて合掌す．真言に曰く」

1146　vajra bandha＜結縛なり．○謂く，金剛結縛なり＞．

「此の印を結ぶに由りて，十種の煩悩結使縛に於て即ち金剛解脱智を成し，

十自在を得」

◎開心印

「次に開心の印を結へ．まさに心門を開くべし．印相はまさに前の縛を開くべし．先ず二乳の上に於て右にtra左にṭa．即ち密語を誦し，心に当てて，三掣縛せよ．一掣一誦扉を啓くが如くす．自心を摧拍せよ．想へ，智門を開きて三業の金剛を発輝すと．真言に曰く」

1147　vajra bandha traṭ＜破壊の義. 裂破の義. 或云くtraṭ は正にこれ戸扉の義. これにまた摧破の義を具すと＞.

「此の印を結ぶに由るが故に，能く身心覆蔽する所の十種の煩悩を摧滅して，内外清浄なること，なほ虚空の如し．自性金剛智をして発動顕現を得さしむ」.

◎金剛遍入三昧印

「次に金剛遍入三昧の印を結へ．二羽金剛縛にして，二大指を屈し，掌に入れ，無名小指の間に置く．進力二度を以て相ひ拄へて環の勢の如くす．前一肘の間に八葉の白蓮華を観じ，その上にa字を置く．二点厳飾するが故に，まさにaḥと名づく．白色にして珂雪の如く，千の光明を流散す．此れ即ち法界体性諸仏の金剛智なり．今以て進力支捻字，心内に安んじて三業齊（ヒト）しく運用す．真言に曰く」

1466　vajrā＜金剛＞veśa＜遍入なり．aveśaここに遍入と云ふ．jra字の引点はaの為なり＞aḥ＜種子．寂静智なり．またこれ即ち入の種子なり．またこれ即ち金剛遍入．即ち如来寂静智に入るなり．○謂く，金剛を以て入るとは即ち如来寂静智に入るなり＞.

「この印の加持に由るが故に，既に心中に入る字相愈光輝し，大威力を以て三世一切の所作の事業に於て速やかに成就を得」.

◎金剛拳三昧耶印

「次に金剛拳三昧耶の印を結へ．印相は前印を以て，二頭指を屈し，大拇指の背を捻ず．印を以て胸臆の間に触れて，まさにこの念をなすべし．此の如来寂静智，常に一切衆生心行の中に在り．しかもいまだ顕現せず．今如来智慧の方便を以てこれを加持するが故に，その中を照らす．久しからずして寂静法の本不生を悟るが故に，三世諸仏金剛の身口意，皆妙方便を以て持し，金剛拳に在り．これを以て心門を闔オホふ．智の字堅固を護す．便ち真言を誦して曰く」

1186　vajra＜金剛＞muṣṭi＜拳なり＞baṃ＜縛なり縛合なり．○謂く，金剛拳を以て密に縛するなり＞.

「此の印を結ぶに由りて三業の金剛をして堅住して散失せざらしむ」.

◎金剛慢印

「バジラガルマの印」となっており，慈雲はgarmaと梵字で注を振りつつ＜金剛慢の印を謂う＞と記すのであるが，「慢」の意であればgarvaになりそうである.「心真言を誦す」とあり『真言事典』も 1882 の真言を充てている.『密教大辞典』726 頁も同見解である.

「次にバジラ＜二合＞ガルマ＜金剛慢の印を謂ふなり＞の印を結へ．印相は，前印を以て分かち二拳と為す. 左は胯を持し，右は心に当つ. 心真言を誦す＜身語意を運想すること，皆初観に依る＞」.

1882　hūṃ.

◎金剛秘密三昧耶印

「次に金剛秘密三昧耶の印を結へ．二羽金剛縛にして右智左の虎口の中に入る．及び心額喉頂を加持す．各真言を誦すこと一遍．真言に曰く」

1776　surata＜妙適悦なり．世間の那羅那里の娯楽の如く，金剛薩埵もまた，これsurataなり．無縁の大悲を以て遍く縁なき無盡の衆生界にめぐらし，安楽利益を得しめんと願ひ，心かつて休息なく，自他平等無二なり．故にsurata と名づく＞stvaṃ＜有情なり．業声に呼ばふ．三字合せて入我我入の義なり．sataは衆生にして因なり．vaṃは仏には果なり．生仏因果不二の義なり＞.

「此の加持によるが故に，四波羅蜜の身各々本位に住し，常恒に護持す」.

◎五仏宝冠【灌頂】印

これは五仏【毘盧遮那・無動・宝生・無量光・不空成就】への真言を指す.

「次に五仏宝冠の印を結へ．二手金剛縛にして忍願並べ堅くして合し，上節を屈し，剣形の如くす．進力各々忍願の背に附著し，禅智相交えて右，左を圧す＜まさに印相の義を知るべし．禅智を結跏と為し，忍願は仏身に像どる．檀戒慧方を以て熾盛光焔を成し，二掌は日月輪，腕は獅子座を表す．この故に如来勝身三昧耶と名づけ，または金剛界自在契と名づく＞．頂上に置き＜法界体性智．毘盧遮那仏，虚空法界の身を成す＞．次に髪際＜大円鏡智を成す．速やかに菩提心，金剛堅固の体を獲＞，次に頂の右に置き＜平等性智を成す．速やかに灌頂の地，福聚荘厳の身を獲＞，次に頂の後に置き＜妙観察智を成す．即ち能く法輪を転じ，仏の智慧の身を得＞，次に頂の左に置く＜成所作智を成す．仏の変化身を証し，能く難調の者を伏す＞．各五仏の真言を調し，これを加持す．毘盧遮那如来の真言に曰く」

640　Oṃ bhūḥ khaṃ＜三身円満の義．また三宝の義．また浄土変の義なり＞.

「次に無動如来の真言に曰く」

1319　vajra satva＜金剛有情なり＞hūṃ＜種子＞.

「宝生如来の真言に曰く」

1210　vajra ratna＜金剛宝なり＞trāḥ＜種子＞.

「無量光如来の真言に曰く」

1055　vajra dharma＜金剛法なり＞hrīḥ＜種子＞.

「不空成就如来の真言に曰く」

897　vajra karma＜金剛事業＞aḥ＜種子＞.

「この如く加持を竟へて，虚空界の一切の仏世尊を想へ．金剛宝冠を以て灌頂を与へるが故に，五物の五冠我が頂に在り．即ち一切如来金剛薩埵灌頂の位を獲得すと」.

◎金剛鬘印

「次に金剛鬘の印を結へ．即ち前印を以て両辺に分かちて金剛拳になし，進力を伸べて真言を誦し，額の前に於て三たび相饒結せよ．しかも二羽分かって脳の後ろにまた結びて鬘を繋ぐる勢をなし，便ち檀慧より徐々に開きて下に散し，冠の繒帛（ソウハク）を垂るる如くす．これを鬘灌頂と名づく．則すでに離垢繒を繋ぐるになる．真言に曰く」

1179　vajra mālā＜金剛鬘なり＞’bhiṣiñca mām＜我に灌頂するなり．mām我の義なり＞, vaṃ＜種子＞.

「この如く加持し竟りて，虚空界の一切の仏世尊，金剛輪鬘繒綵等を以て具足灌頂を与ふる蒙ると」.

◎金剛甲冑印

「次に金剛甲冑の印を結へ．遍身擐甲，また二手を以て拳になし，心前に置く．まさにこの思惟をなすべし．我今已に正覚を成す．常に諸の有情に於て大悲心を興し，無盡の生死の中に於て恒に大誓荘厳の甲冑を被り，浄仏国土成就衆生の為に諸仏に歴事し，悉く有情を菩提樹に坐し天魔を降伏し，寂勝覚を成ぜしむるが故に，今如来慈悲の甲冑を被るべしと．この如く観じ已へて，即ち二拳進力を舒べ，進指の面に於てOṃ字を想ひ，力度の面にṭrāṃ字を置け．緑色白光なり．藕糸（グウシ）を抽くが如く鉀韜索を為す．即ち被甲の真言を誦して曰く」

922　Oṃ vajra kavace＜金剛甲冑＞vajra kuru＜金剛作＞vajra vajro＜金剛また金剛＞’ham＜我なり＞.

「或はまた此の真言を誦す」.

33　Oṃ abhaye＜無怖畏なり＞vajra kavaca＜金剛甲冑＞bandhe＜結縛＞

rakṣa maṃ＜我に於て擁護せよ＞. hūṃ haṃ＜種子＞.

◎歓喜印

「真言を誦するに随ひて，進力二度を以て，初めに心上に於て相遶すること三帀（サンソウ）．分かちて背後に至りてまた相遶し，還却して臍に至り相遶し，次に右膝に遶し，還りて臍に至りて皆相遶す．次に腰後に至り，却って心前に至る．次に右の肩に遶し，次に左の肩に遶し，次に喉に至り，また頸の後に至り，額の前に至り，また脳後に至る．毎処皆相遶すること三帀せよ．前の如く徐々に両辺に下り，甲の繋がる勢の如くす．檀慧度より次第に舒べて十度を散す．便ち二手を以て旋転して舞の如くす．また金剛掌をなし，心に当てて真言を誦し，三たび拍掌す．一切の衆聖縛を解き，悉く皆歓喜したまふ．己の身即ち金剛薩埵の体と成る．真言に曰く」

1032　vajra＜金剛＞tuṣya＜歓喜＞hoḥ＜種子．歓喜の義なり＞.

◎金剛慢印

「次に前の金慢の印に住せよ＜皆初観の如し＞，黙して此の真言一編を誦せよ」

1621　sarvaṃ kuru＜一切所作＞yathā sukham＜如是楽なり．業声に呼ぶ＞.

「即ち頭上の冠中に於て五仏を想へ．各本形色に依り，本印威儀に住し，並びに全跏して坐したまひ，頂上の毘盧遮那如来は白色なり．二拳左の大指を舒べ，右の拳を以て初分を握って心に当つ．前面の無動如来は青色なり．左拳衣角を持し，心に当て，右手指を舒べて掌を右の膝の上に覆（カブ）せ，指の頭，地に触れる．右に於て宝生如来黄色なり．左拳は前の如し．右の掌仰げて施願にす．後ろに於て無量光如来赤色なり．左拳は慢にして蓮華莖を執り，右の拳を以て開敷す．左に於て不空成就如来緑色なり．左拳は前の如く心に当つ．右の大指頭指相捻じり，抜済の勢にす．拳を揚げて乳に近づく．この如く加持し已ぬれば，自身まさに金剛薩埵の体と成るべし」.

以下，さらに「次に大楽金剛不空三摩耶随心印を結へ」と続く．この「大楽金剛不空三摩耶随心印」は№ 1125 には載らず，すでに№ 1119 と№ 1125 とが別の流れに属すテキストを刻んでいるということが明らかである．したがってこの印言から以降は，印言を翻字し，慈雲の割注を翻刻するのみとしたい．

◎大楽金剛不空三昧耶随心印言

1931b　he＜呼召声＞mahā sukha vajra＜大楽金剛なり＞satvāya＜勇健者＞hi śīghraṃ＜急なり早なり．業声に呼ぶ．如上の三句は，けだしこれ降赴を請ふ

の辞＞mahā sukha vajrāmogha samaya＜大楽金剛不空真実三昧耶なり＞manupālaya＜随護なり．anuは随の義．a ma相通ず．pālaは護なり．yaは助声．作業ある義なり＞prabuddhaya prabuddhaya＜極覚なり．重ねてこれを言ふは，義の幽深を成す．或はこれ理具事盡の二菩提．praの字は縁多の義．余所にこれを明かすが如し＞surata stvaṃ＜妙適薩埵なり．naranariの娯楽を謂ふ＞manurakto me bhava＜manuは随護なり．raktaは守護．meは我の第七転なり．まさに我が処に於てと云ふべし．bhavaは多義なり．謂く有の義，性の義，得の義，為の義なり．raktaは守護．rakṣaに同じ＞sutoṣyo me bhava＜略出経の注に云ふ，我が所に於て歓喜すと．この中suは妙の義．toṣyoは歓喜．meは我の第七転呼．bhavaは得なり＞sudṛś me bhava＜百字真言にdṛḍho me bhavaと．略出経の注に，堅固我と為す．この中su字は妙の義，異と為る．問ふ，語路上の句と同じ．注の義異なるべし．答，梵文多く義を含むによりて自ら幽玄なり．漢文をこれを伝へてただ一辺を得るのみ．上の句の如きは歓喜を本尊に属す．この句の如きは堅固を行者に属す．影略互いに顕かなり．けだし本尊我が所に於て歓喜すれば我をして妙歓喜を得さしむ．本尊妙堅固に住すれば行者をして堅固を得さしむの義なり＞supoṣyo me bhava＜妙増益，我をして得さしむなり＞bhagavaṃ＜世尊なり＞anādi nidhanaḥ satva＜いまだ注義を見ず．或はanaは無なり．adiは始なり．尼陀那は十二部の中の因縁経なり．まさに無始因縁の薩埵と云ふべきか．また護菩薩の賛にduryodhana「敵対すべきこと難き」なり＞sarva siddhi me＜一切悉地なり．後俗自説．第七転呼を兼ぬるなり＞prayaccha eṣa tvaṃ＜この勝止を授与し竟んぬ＞akṛṣaya praveśaya＜anaは衆多．kṛṣa作加審諦勇健声呼．praveśayaは極遍入なり＞samaye ramatva＜上に通じて遍入三昧なり．第三転を以て呼ぶ．ramatva未だ考えず＞vaśi karomi＜敬愛．自説声に呼ぶ＞mila mudrā mantra padai＜印の章句なり．drāの字の引声，下に連ねてāmantraと成る．自ら召請の義を含む．miの字の義更に考えよ．或はこれimuに同じく指示の声これなるか＞jaḥ＜鉤召の義＞hūṃ＜引入の義＞vaṃ＜縛住の義＞hoḥ＜歓喜の義．この一段句義他日を俟つのみ＞．

この真言は，№1119，№1120，№1124に載る．慈雲は№1119のこの箇所で釈を行う．№1125とは，次第の流れの上で，ここから方向性を異にする．なお冒頭に近い「a ma相通ず」の部分に関しては，先に第4節で1338「大乗現証百字真言」に関して記したのと同様の理解が見られよう．

◎閼伽印言

上記に続いて「次に閼伽を献ぜよ．諸の香水を盛り，水の上に花を泛べて壇

内に置き，左右の膝に近く，閼伽の印を以てこれを加持せよ.印相は金剛合掌」云々と指示があるが，この「閼伽印言」以下の 2 点については，『大正大蔵経』には慈雲が用いたのとは別のものが挙がっている．まず第 1 点は「唵字真言」と呼ばれるものである.

118　Oṃ kāro＜作なり＞mukhaṃ＜面なり口なり門なり＞sarva dharmā＜一切法なり．多言に呼ぶ＞nām＜帰敬＞ ādyā＜乗＞nutpannatā＜随流なり，已上＞.

慈雲による釈に一部不正確な面があるが，『真言事典』によれば「このオーム字門に，一切法の本来無性なるものよ」という釈が可能である．これは№ 1119，№ 1120（№ 1120B にも），№ 1121 に載る真言であり，「本不生」は ādi-anutpāda であって，この連声により ādyānutpannatā となる．慈雲はその切り方と釈に関して若干誤解・誤釈している．慈雲が閼伽真言として唵字真言を用いた理由に関しては不明である.

その後次のような指示が続く.

「すなはち閼伽器を捧げて額に近づけ奉献し，聖尊を想念しまず三滴を傾けよ．真言に曰く」

以下，慈雲が用いたのは『大正大蔵経』№ 244 の『最上根本大楽金剛不空三昧大教王経』巻五 812C に載る真言と同一のものである（福田 1987：58）．この部分の解読・解釈に関しては，筑波大学インド哲学教授小野基氏より詳細なご教示をいただいた．ここに深謝したい.

paramasukhāśaya＜第一楽性なり．aśaya は意楽の義．または楽欲の義．または性なり＞salita＜水なり．普賢の賛に salila は水なり（※ 21 頌；Devi 1958）．涅槃経に，沙利藍は水の別名＞vilāsanāmitair namāmi bhagavantam＜嬉戯無量礼世尊なり．この中転声助声，ra 字，後俗交沙．義自ら深玄にして言を以て伝ふるべからず．梵文を玩ぶ者，自らまさにその意を得るべし＞jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ＜鈎索鎖鈴＞he he he he＜歓喜の声＞pratīccha kusumāñjalim, nātha＜praticchaは授与なり．kusumamは花の名なり．jāliは合掌，arthaは尊者なり＞.

小野教授が提示してくださった訳を参考にすると，「最高の楽の拠り所たる水よ！無限の歓喜もてわれは世尊に帰依す．おお何たる喜び！ああ，ああ．花束としての合掌を受けたまえ．主護者よ」と釈せよう.

c. 羯磨会

以下「諸尊を観じ，羯磨の印及び本真言を以て各これを安立せよ」とある.

羯磨会の印言の説明である.

◎五秘密印言

この箇所は，上掲した『五秘密軌』に大きく関わる.

「まず五秘密を観ぜよ．金剛薩埵，白蓮華台に坐し，端厳にして処す．形貌は前に成する所の身法の如し．まさに大印に住すべし．心真言を以てこれを安立すべし」.

「次に大聖の前に於て欲金剛を想へ．形服色皆赤し．金剛弓箭の印に住す＜大悲の欲，箭を以て二乗の心を害す．手にこの箭を持つ所以にて，その欲，離倶幻平等の智身を現す＞．次にその印を結へ．二の金剛拳を用ひて弓を彎（ヒ）き，箭を放つ勢にせよ. 真言に曰く＜赤色理曼の中の宝幢如来は，身色日暉の如し＞」

233　jaḥ＜四秘密．四摂を以て言を起こす＞vajra dṛṣṭi＜金剛見なり＞sāyake＜いまだ句義を観ず．嘉祥云はく，旧に薩庾□□聞経歓喜と云ふ．これに依らば歓喜者か＞maṭa＜両眼の種子＞.

「次に大聖の右に於て計里計羅尊を想へ．色白なり．二の金剛拳を以て臂を交へて抱印に住す＜抱持五股杵なり，これ即ち三昧耶体故．中国の言に於て触と名づく．衆生を捨てず，必ず解脱せしむるを以ての故に，触性即ち菩提と明かさんと欲するが故に，抱持の相に住するが所以に，その触浄倶幻平等の智身を現す＞．次にその印を結へ．二拳胸の前に臂を交へて＜左を内にし，右を外にす＞，これを抱け．真言に曰く＜中台の色に同じ＞」

1896　hūṃ vajra kelikili＜金剛触なり＞hūṃ＜触抱．将に金剛薩埵の体性に応ずるか＞.

「次に大聖の後に於て愛金剛を想へ．形服皆青なり．右の臂を堅めて摩竭幢を執る．左の金剛拳を以てその肘を承け，また共に＜二手＞幢を持す＜悲愍を以ての故に，愛念の縄を以て普く衆生を縛す．いまだ菩提に至らず終に放捨せず．また摩竭大魚の啖らひ遇ふ所を呑み，一たび口に入り已れば更に免るる者なきが如し. 所以にこの摩竭魚を持してその愛縛捨離倶幻平等の智身を現す＞．次にその印を結へ．二拳左は右の乳に近づけ，乃ち右の肘を屈して左拳の上に安んじ，臂を堅めて幢の如くせよ．真言に曰く＜青色理曼の中の弥陀＞」

889　vaṃ vajriṇi＜金剛．多声呼＞smara＜憶念なり＞raṭa＜種子＞.

「次に大聖の左辺に於て慢金剛尊を想へ．形服皆黄なり．二金剛拳を以て各胯に安んじ，頭を左に向けて少しく低（タ）れる＜無過上智を以て一切衆生を悉く毘盧遮那如来の体を証せしめ，世間出世間に於て皆自在を得，所以に傲誕の威儀に住してその我無我倶幻平等の智身を現す＞．次にその印を結へ．二拳

各胯に置き，頭を以て左に向け，少しく低れてこれを礼せよ．真言に曰く」＜黄色．胎金同じく南方修行門に在り．今この五密は方便究竟を為す．その深玄色なし．所以理趣の五秘密は涅槃を越えざるが故なり＞」.

1950　hoḥ vajra kāmeśvari＜金剛欲自在．女声に呼ばふ．kāmaは欲．śvaraは自在＞traṃ＜黄色．福徳荘厳呼＞.

以下,「四隅の内供養」「四隅の外供養」「四門印言」へと続くのであるが,五秘密の儀には関わらないため詳細は省くこととし，次第と印言のみ,『真言事典』の番号を記すに留めたい.

◎内供養印言　春（1937）・雲（765）・秋（1273）・霜（778）
◎外供養印言　東南（1934）・西南（1935）・西北（1932）・東北（1933）
◎四門印言　鉤（1425）・索（1134）・鎖（1312）・鈴（996）

末尾には「以上十六尊，皆適悦の目を以て金剛薩埵を瞻仰す．五仏冠首に各薩埵跏し，月輪の上に処す．冠鬘衣服その身色に随ふ」とある.

d. 三昧耶会

以下「衆聖三昧耶の印を陳ぶ」とあり，三摩耶会が続く.

◎金剛秘密三昧耶印言

「金剛薩埵，前の金剛秘密三昧耶の印を結へ．及び真言を誦して曰く」

1776　surata stvaṁ＜疏の十七に云く，suratаはこれ着の義なり．微妙の法を着するが故に．またこれ共住安楽の義なり．謂く妙理とともに住し現法楽を受くるなり．また妙事業に楽着するが故に．また棄邪赴正の義の故に．またこれ遍欲求の義の故と．stvaṁは有情の業声を呼ぶ．入我我入の義なり＞.

「次に前の大楽不空三摩耶の随心印を結へ．二頭指＜箭羽＞を屈し，甲を背けて相着け，箭の羽の如くす．二大指＜箭幹＞を並べてこれを押す．拳を合す．金剛箭の印なり＜前の羯磨の真言を誦す．已下諸尊並びに同じ＞」

以下，金剛喜悦の印，金剛愛の印，金剛欲自在の印と続く．真言の注記はない.

これに続き，嬉戯・笑・歌・舞，および鉤・索・鎖・磬，各々の印相が記される．そして最後に「この如く諸尊を安立し已んぬ．金剛薩埵に十六尊ありて眷属となる.行者自ら本尊の瑜伽に住するに，また十六尊ありてこれを囲饒す．一々の聖尊の形色衣服華坐月輪．皆明了にすべし」と締められる.

e. 微細会

以下「次にまさに四秘密羯磨印を結び，即ち金剛歌讃を誦すべし」と続くが，これは『仏書解説大辞典』の記述等から，微細会の説明に移っていることが判る．

◎四秘密羯磨印と金剛歌讃

この「讃王」は「金剛薩埵讃」とも呼ばれ，大楽軌における梵讃である．『真言事典』には収録されておらず，「◎？」と記されるのみであるが，『密教大辞典』「金剛薩埵讃」の項によれば，下記のように翻字しうる．＜＞の中は慈雲の注記である．なお，この讃王は№1119のほかに，№1120（『略出軌』517a-520c），№1124（『瑜伽念誦儀軌』535a），そして№1125（『五秘密軌』537b）に挙がる．したがって慈雲によるこの『儀軌私記』では№1119のほかに№1125に挙がっている（45頁；注記等はなし）．

「此の讃四句あり．第一句を誦するときは，まさに欲金剛印を結ぶべし．第二句を誦す誦すときは，計里計羅金剛の印を結へ．第三句を誦すときは，愛金剛の印を結へ．第四句を誦すときは，慢金剛の印を結へ．則四種の歌詠を成す．此の讃王の故に，大楽大随，愛楽適悦，皆如意堅固なるを得．その讃に曰く」．

sarva＜一切＞anurāga＜随愛．または随染なり＞sukha＜楽なり＞satmana sa＜一＞．

＜saはこれ指示．tmaは我なり．已身なり．naは男声能の義．saは後俗説他○蓋し，随染妙楽，薩埵已身に随ひ，已身薩埵に随ふの義＞．

tvam＜汝なり＞vajra＜金剛＞satva＜有情＞paramaḥ＜第一＞surataḥ＜二＞

＜妙適．終讃の声．surata所属声なり．けだし第七識の妄に第八識を執り，我癡我見我慢我愛と為るを浄めて平等性智を成す．その義と思うべきなり＞．

bhava me＜得我．第七転に呼ぶ＞mahā sukha＜妙楽＞dhṛti＜堅固＞ceyadaḥ＜三＞．

＜ceyaは影像．daは能所相対して他に向かふの声．けだし能く意識の縁慮を浄めて，染浄有漏の心に於て妙観察智を成するの義なり．妙楽堅固影像盡未来際金剛薩埵に同じ＞．

prati＜随逐の義＞padya＜句の義，足の義．また勝初の義＞siddhya＜成就＞cala＜動なり＞ghu＜九義あり．今はこれ地の義か＞pranataḥ＜礼敬なり．慢印即ち礼印なり．○大勤勇を起こして無余の有情を盡し，成仏せしむるはcalaghuの義＞．

さらに『密教大辞典』(689 頁) によれば，意味づけは次のようになる．

欲	大円鏡智	阿頼耶識	阿閦如来	東
触	平等性智	末那識	宝生如来	南
愛	妙観察智	意識	阿弥陀如来	西
慢	成所作智	前五識	不空成就如来	北

（薩　法界体性智　菴摩羅識　大日如来　中央）

おそらくこの讃王は，唯識から四秘密，すなわち五秘密に向かう讃であって，唯識から理趣経の五秘密・悲智不二の境地に向かう讃と言えるだろう．

◎最勝真実讃

「また最勝真実讃を誦して曰く」＜即ち慢印に住して誦すべし＞．

784　mahā sukha＜大楽＞mahā rāga＜大愛＞mahā vajra＜大金剛＞mahā dāna＜大富饒＞mahā jñāna＜大智＞mahā kāma＜大業＞vajra satvā＜金剛薩埵＞padya＜勝初＞sidhya me＜自説声．於声呼．○謂く，大楽大愛．大金剛大富饒．大智大業．金剛勝初薩埵．我に於て成就を得さしめたまへ＞．

これは№ 1119 と№ 1123 に載る讃であり．№ 1123 の頸次第にも出ていた．慈雲はこの№ 1119 に注記を載せている．

◎眼印（五種視）

「次に瞻視の印を以て本尊五尊を瞻矚せよ」以下，眼印の相が説かれる．真言は記されていない．

順に，大適悦金剛不空適悦警悟の印（金剛薩埵），大適悦金剛不空の箭印（金剛欲），大適悦の視印（金剛触），大適悦金剛幢旛の印（金剛愛），眼視請本尊入身の印（金剛慢）である．以上は『仏書解説大辞典』による．

◎尽身心愛染印

これは愛染明王の印である．

◎金剛熾盛日三昧耶印言

「難調伏の者を辟除すと想へ」とあり，これは辟除印である．真言は hūṃ である．

f. 供養法

以下供養法に移行し，「一切有情を利益し安楽し，儀軌の歌詠と讃歎，我今変化しこれを成し，遍く虚空界を覆って以て克（ヨ）く供養すと」とされる．

◎唵字真言

「唵字の真言Oṃを誦せよ」＜初めの如し＞.

118　Oṃ kāro mukhaṃ sarva dharmānām ādyānutpannatā.（「オーム字門に，一切法の本来無性なるものよ」）.

ここで「初めの如し」とあるのは，本稿で先に5）b「普賢行願以降」の中で示した「閼伽真言」において用いられた「唵字真言」に同じ，との意であろう.

◎一百八名讃

続いて「後に一百八名讃を誦して曰く」と続く．慈雲による真言への注記の翻刻のみに留める.

この「一百八名讃」は№1119のほかに，№1120（『略出軌』518a-520c）に挙がる.『真言事典』では「付9」とナンバリングされている.

parama＜第一＞adya＜一；勝初なり＞mahā satva＜二；大有情．大勤勇．大心なり．けだしこの一句は欲金剛，第一勝初大薩埵なり＞mahā rata＜三＞mahā rati＜四；大適悦．女声呼．けだしこの一句は触金剛．大適悦．定慧相触れて相離れず＞samantabhadra＜五；普賢＞sarv'ātma＜六；一切我．一切已身なり．けだしこの句は愛金剛．普賢一切我，摩竭幢一切を呑摂し，残余なきなり＞vajra garva＜七；金剛慢多言呼＞pate pate＜八；主中の主なり．けだしこの句は慢金剛．三界に自在を得て能く堅固の利をなすなり＞citta＜心なり＞satva＜九；薩埵＞samādhyā＜三摩地．これに等持と云ふ．謂く平等地持なり＞gra＜十；勝上なり．この句は東方発心門．阿閦の義＞vajra vajra＜十一；金剛の義．これは能く摧伏する者なり＞mahā dhāna＜十二；大富饒．この句は南方修行門．福徳荘厳．宝生の義なり＞samantabhadra＜十三；普賢なり＞caryā＜行なり＞gra＜十四；勝上．この句は西方成菩提門．阿弥陀の義なり＞māra māra＜十五；魔なり．これは摧伏の魔なり．また魔を以て直ちに薩埵の徳と為すなり＞pramardaka＜十六；摧伏の義．普賢行願賛にkleśa balam parimarda煩悩力摧伏なり（※39頌；Devi 1958）．これは謂く，魔々極摧伏者なり．これは北方涅槃門．摧大力魔の義なり．けだし人法二空の智，煩悩所知に対す．降三世明王の足，大自在天及び烏摩妃を踏むの類なり＞sarva bodhi＜十七；一切覚なり＞mahā buddha＜十八；大覚なり．bodhiは法．所覚なり．buddha人，能覚者なり＞buddha buddhāgra＜十九；仏勝上なり＞janmajaḥ＜二十；鉤召の種子．即ちこれjanmaは衆生界なり＞vajra＜金剛．けだしこれ仏家に生まれしを仏子と称するの義なり．故に鉤召金剛と云ふ＞hūṃkara＜二十一＞hūṃkāra＜二十二；即ちこれ降三世の異名．この中hūṃは自在能破の義．また能満願の

義．大力の義．恐怖の義．等観歓喜の義なり．karaは造作の義．謂く摧破をなす者．能満願をなす者なり＞lokeśvara＜二十三；世間自在の義＞maṇi＜宝なり＞prada＜二十四；施与なり＞mahā rāga＜二十五；大貪の義＞mahā saukhya＜二十六；大楽の義＞kāma＜大欲＞mokṣa＜二十七；解脱なり＞mahā dhāna＜二十八；大富饒なり＞trikāla＜二十九；三時の義＞strī bhava＜三十；三有＞strya＜三なり＞grya＜三十一；勝上なり＞trilokā＜三世なり＞gra＜三十二＞tridhātuka＜三十三；三界の義＞sthā＜三十四；住なり＞vara＜願の義＞pra＜勝なり＞bhāva＜有なり＞vyakta＜二十五；相応なり＞sūkṣma＜妙喜安穏なり＞sthūla＜吉祥＞saṃcaya＜聚＞jaṅ＜本誓＞gama＜行＞pravara＜勝願なり＞pra＜勝なり＞ptye＜得なり＞bhava＜有なり＞sāgara＜海の義＞śodhana＜四十；清浄＞anādi＜勝初持＞nidhāna＜所施豊饒＞tyaṃtikānta＜四十一＞prāka＜随処＞sarva＜一切＞mā＜我＞sthitaḥ＜四十二；住処＞hṛd＜名称．対注の纈哩多．もしくはkṛtaは名称．もしくはhṛtaは心なり＞mudrā＜四十三；印なり＞yoga samayaḥ＜相応等持なり＞tatva＜如如＞satya＜四十五；諦の義＞mahā mahāḥ＜大中の大なり＞tathāgata＜四十七；如来＞maha siddha＜四十八；大成就者＞dharma karma＜四十九；法業なり＞mahā buddha＜五十；大覚＞saddharma＜妙法＞satkarā＜sataは指示なり＞ma＜kāmaは欲なり＞patha＜道なり＞bodhi citta＜五十一；覚心なり＞subo＜月なり＞dharka＜五十三；水の義．この義相応しからず．すべからく端厳聚の義を用ふべし＞vajra＜金剛＞krodha＜五十四；暴悪なり＞mahā krodha＜五十五；大暴悪なり＞jvāla＜光明＞pralayana＜囲繞＞makaḥ＜五十六；帰依者＞mahā vinaya＜大障．または能調伏者＞duṣṭā＜怨なり＞gra＜五十八；勝上の義＞rudra＜暴なり＞raudra＜五十九；大暴なり＞kṣayaṃkaraḥ＜六十；盡断の義＞sarva śuddhi＜六十一；一切清浄なり＞mahā padma＜六十二；大蓮華＞prajno＜般若＞paya＜六十三；方便なり＞mahā naya＜六十四；大乗なり＞rāga śuddhi＜六十五；貪浄なり＞samādhy agra＜六十六；等持勝上なり＞viśva raga＜六十七；種々行＞maheśvara＜六十八；大自在の義＞ākāśāmantya＜六十九；虚空無量なり＞nityave＜七十＞sarvabuddha＜七十一；一切覚＞mahā laya＜七十二；勝蔵なり＞vibhūti＜遍顕現＞śrī＜七十三；吉祥の義＞vibho rāja＜七十四；王なり＞sarv’āśā＜七十五；一切意楽なり＞paripūrakaḥ＜七十六；満足者＞namastu stu＜七十七；帰命称讃＞namastu＜七十八＞namastu stu＜七十九＞namā＜帰命なり＞namaḥ＜八十；極帰命なり＞bhukto＜解脱＞’haṃ＜我なり＞tvaṃ＜八十一；汝なり＞pra＜極なり＞padya＜尊尚．主

領なり＞mi＜八十二；我なり＞vajra satv'ādya＜八十三；金剛勝上薩埵なり＞siddha mām＜八十四；成就於我なり＞.

これに続き，以下の五言による詩句が記されている.

「もし此の讃王を持し　金剛法語を誦すれば　所楽まさに成就せんとして速疾にして余倫無かるべし

毎日まさに時に及ぶべし　称し已はれば諸罪を離る　まさに一切の苦を脱し　浄土まさに現前すべし

纔（ワズカ）に誦すれば衆福円かにして　吉祥の増し明盛ならん」

さらには閼伽，そして諸尊羯磨印などが続く.

「また前に准じて閼伽を加持し，如法にこれを献ぜよ」

「遂に諸尊羯磨の印相，及び三昧耶契等を結び，皆本明を誦する＜或はこの中単に八供養の印明を陳ぶるもまた得＞．前の如く周くしおはれ」

◎金剛熾盛日三昧耶印

「次に金剛熾盛日三昧耶の印を結へ．左に旋転して界を解くと想へ．幷に本真言を誦する，前に同じ」.

◎奉送（ブソウ）印

この奉送真言は№1119のほかに，№1120（519b-520c），№1121（523a），№1122（527c），№1123（530c）に挙がる．したがって慈雲によるこの『儀軌私記』では，№1119のほかに№1123で言及されている（37頁；頸次第のため注記等はなし）.

「次に奉送の印を結へ．印相は金剛縛ぞ．直く二中指を堅めて相合して針の如くし，心に当てて奉送の真言を誦せよ．畢らんと欲するとき印を挙げて頂上に近づけ，中指よりまず開きてこれを散じ，頂上に合掌せよ．諸尊も本宮に還りたまふと想へ．真言に曰く」

155　Oṃ kṛto vaḥ＜已作勝上なり＞sarva satva＜一切衆生なり＞arthaḥ＜利益＞siddhir＜成就なり＞dattā＜授与なり＞yathā＜如是なり＞'nugā＜随順なり＞gaccha＜去なり．撥遣の文＞dhvaṃ＜帰還なり＞buddha viṣayaṃ＜仏国土なり＞punar āgamanāya tu＜また降赴を垂るなり＞Oṃ vajra＜金剛なり＞satva＜有情なり＞muḥ＜解脱なり．○謂く，すでに勝上利益成就をなし，一切衆生を授与し竟んぬ．願くは一切諸仏菩薩本国に帰還し，もし重ねて請召せばただ願くは赴降しまたへと＞.

◎宝印

その後，撥遣を行じた後に結誦すると言われる宝印（八田1985：158）が

収められている．これは№ 1119 には載らず№ 1123 のみに挙がるものであるが，頸次第である№ 1123 には注記が叶わず，また№ 1125 には収められていないため，慈雲はこの№ 1119 の末尾に収めたものであろう．

「およそ道場を出んと欲せば，まさに宝印を結ぶべし．二羽金剛縛し，進力宝形の如くせよ．禅智もまた爾り．印相心より起こして，灌頂処に置き，真言を誦して手を分かち，鬘を繫るが如くせよ．また甲冑の印を成せ．真言はこの如く称えよ」

1244　Oṃ vajra ratna＜金剛宝なり＞abhiṣiṃca mām＜我を灌頂せよ，なり＞sarva mudrā me＜一切印我＞dṛḍha kuru＜作堅固なり＞vara＜勝願＞kavacena＜甲なり，能声＞vaṃ＜種子＞．

「此の護身印を用ひて己の身を加持せよ」と締めくくられる．

以下，32 頁から 34 頁にかけて儀軌法要，34 頁から 36 頁にかけて，高麗版に載る敬愛法が収録されている．真言も含まれてはいるが，本稿に直接関わるものではないため，省略する．

結.

以上，本稿では儀軌 3 点の注記を併せた『金剛薩埵修行儀軌私記』の詳細を検討することによって，慈雲が，金剛儀軌 7 点のうちに盛り込まれる主要心明に関し，極めて無駄を廃したかたちで注解を施している実態を明らかにすることができた．慈雲は，7 点全体の基盤として「大楽軌」を捉えてはいるものの，7 点相互の相違点にも意を用い，まず№ 1123 の頸次第を編むことで，№ 1119 から№ 1124 までに共通する次第を案出した．その一方で，№ 1122 や№ 1124 に挙がる真言に関しては，№ 1119 もしくは№ 1125 のどちらかを選択しつつ，より相応しい文脈に取り込む形でその注釈を行っている．いずれにしても，重複を避け，無駄を省いた形で主要な金剛薩埵関連の真言をこの『金剛薩埵修行儀軌私記』で解説し終えたと言える．したがってこの作品は，3 点全体で一つの意味ある統一体を形成するのであり，その全体としての名が『金剛薩埵修行儀軌』，すなわち金剛薩埵への入我我入のための次第書なのである．

筆者は先に，既出の拙稿において，慈雲による『法華陀羅尼略解』が，『妙法蓮華経』の密教儀軌としての『観智儀軌』からの影響のもとに記されたのではないかとの仮説を提示し，あわせて「五悔」が法華経法と真言密教の結節点となりうるとの見通しを立てておいた（秋山 2012）．『観智儀軌』は，前半が

法華経五陀羅尼に基づく胎蔵法，後半が法華経普賢菩薩呪に基づく金剛法として，胎金二部の合揉により構成されている．「法華陀羅尼」を扱うことは，おそらく慈雲が，このような胎金不二の秘儀，大悲と大智の共なる実践を志向していたことを物語るだろう．この志向性は，すでに『金剛薩埵修行儀軌』を手掛けていた 1802 年当時から持続していたのである．慈雲は『金剛薩埵修行儀軌』においても，金剛薩埵との合一に向けての修行の究極目的を，五秘密の合一に見る大智大悲の融合のうちに置いていた．金剛薩埵法の目標は，慈雲にとって，あくまでも月輪と蓮華の統合という次元に置かれねばならなかったのである．この意味で，三作を併せ含む『金剛薩埵修行儀軌』は，五秘密の秘儀までを収める「金剛薩埵の修行儀軌」なのであり，その総題は，第 1 作の「大楽軌」への注疏の題とは区別して意義づけられねばならないだろう．その意味で，第 1 作の題辞については，筑波大所蔵本のように『大楽金剛薩埵修行成就儀軌』とする方がむしろ望ましいのかもしれない．

もとより慈雲は，そもそもテキストの注記ではなく，金剛薩埵成就という目的をこそ主眼に据えていたのではなかっただろうか．慈雲はおそらく，五秘密における大悲大智・蓮華月輪の一致のうちに『理趣経』の本意を読み取り，「五秘密軌」においてクライマックスを迎える構造を選択することを意図したのであろう．『金剛薩埵修行儀軌私記』という総題には，このような意味が秘められていると考えてみたい．

『理趣経』には，大智と大悲を併せた大乗比丘の究極の境地を表す性格が秘められている．『理趣経』読誦には，その儀軌実践にまで及ぶパースペクティヴが込められると考えたい．『理趣経』を常用経典として普段より読誦する行為は，大悲大智の一致における菩薩行の実践という次元を絶えず想い起すことに他ならない．慈雲はこのことを，新たな総合的・金剛薩埵理趣儀軌たる『金剛薩埵修行儀軌』を編むことで立証したと言えるだろう．慈雲が 1802 年に到達したこの地平が，翌年にはさらに，金胎合揉儀軌としての『観智儀軌』を想起させる「法華陀羅尼」の略解を執筆するという行為へとつながるのである．晩年の慈雲は，大智大悲の合一，文献実証的梵学と菩薩行とを見事に合致させた境地にあったと言えるだろう．

≪参考文献≫

秋山　学 2017「慈雲尊者の無表論―『表無表章随文釈』を中心に―」筑波大学『地域研究』38，1-18.

秋山　学 2016a「義浄と慈雲尊者―有部律から四分律へ，そして正法律へ―」「東ア

ジア文化の基層としての儒教イメージに関する研究」論文集，19-32，筑波大学日本美術史研究室.
秋山　学 2016b「慈雲尊者最晩年期の密教思想―『理趣経講義』から『法華陀羅尼略解』へ」『異文化理解とパフォーマンス』春風社，282-300.
秋山　学 2015「慈雲尊者による儒教理解―『神儒偶談』『法華陀羅尼略解』『雙龍大和上垂示』を手がかりに―」『古典古代学』第 7 号，39-66.
秋山　学 2012「慈雲と天台僧たち―『法華陀羅尼略解』の位置づけをめぐって」『文藝言語研究　文藝篇』62，1-41.
秋山　学 2010『慈雲尊者と悉曇学―自筆本『法華陀羅尼略解』と「梵学津梁」の世界―』筑波大学.
Devi, Sushama (ed.) 1958 *Samantabhadracaryā-praṇidhānarāja* New Delhi.
福田亮成 1987『理趣経の研究　その成立と展開』国書刊行会.
長谷宝秀（編）1926『慈雲尊者全集〔全 19 巻〕思文閣出版（再版）.
八田幸雄 1985『真言事典』平河出版社.
鎌田茂雄，河村孝照ほか（編）1998『大蔵経全解説大事典』雄山閣.
川崎一洋 2007「『理趣経』十七尊曼荼羅の成立に関する一試論」『智山学報』第 56 輯 457-473.
小峰彌彦 2016『曼荼羅入門』角川ソフィア文庫.
前田弘隆（監修）2008-2010『梵学津梁：高貴寺蔵書リスト』高貴寺.
松長有慶 2006『理趣経講讃』大法輪閣.
密教大辞典編纂会 1931『密教大辞典』法蔵館.
宮坂宥勝（訳注）2011『密教経典』講談社学術文庫.
中村元ほか（編集）2001『岩波　仏教辞典』岩波書店.
小野玄妙（編纂）1964『仏書解説大辞典』（改訂）大東出版社.
真言宗智山派宗務庁『金剛頂経入門　智山教化資料第 13 集』1985.
静　慈圓 1997『梵字悉曇』朱鷺書房.
辻直四郎 1974『サンスクリット文法』岩波全書.
栂尾祥雲 1943『秘密事相の研究』高野山大学密教文化研究所.